

伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会

きんか
錦窠図譜の世界

—幕末・明治の博物誌—



2003年10月17日～30日

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

目 次

展示会・講演会開催にあたって	1
伊藤圭介の人と学問	3
圭介をめぐる人間群像	7
植物へのまなざし	17
描かれた動物 - 獣・虫・魚 -	27
伊藤圭介と名古屋大学	31
特論 1 国立国会図書館の伊藤圭介編資料集	37
特論 2 日本初の理学博士伊藤圭介の誕生	40
特論 3 伊藤圭介と医学	44
伊藤圭介関係年表	46
参考文献	51
略系図	52
コラム 圭介肖像画の賛(6) 錦窠図譜に見る伊藤圭介の蔵書印(15)	
圭介最晩年の二行書(16) 電子展示(25)	
手紙に見る圭介の素顔(26) 博覧会と伊藤圭介(36)	



晩年の伊藤圭介
(名古屋大学所蔵)

展示会・講演会開催にあたって

このたび、名古屋大学附属図書館及び同附属図書館研究開発室の主催で、伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会を開催することになりました。

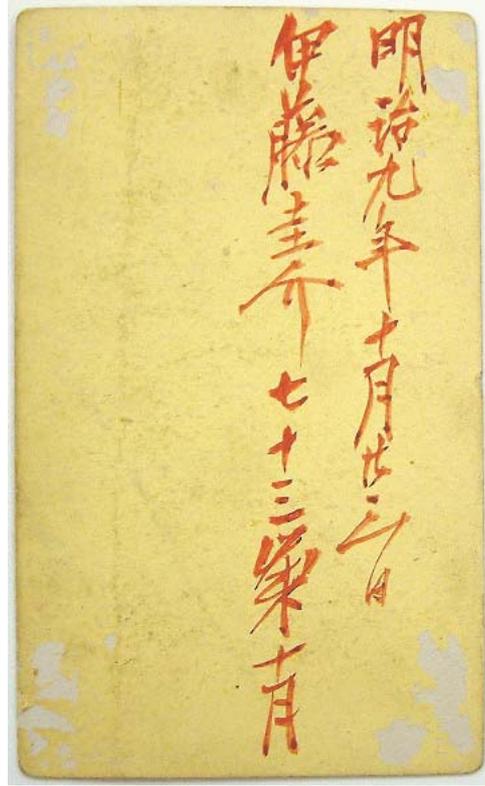
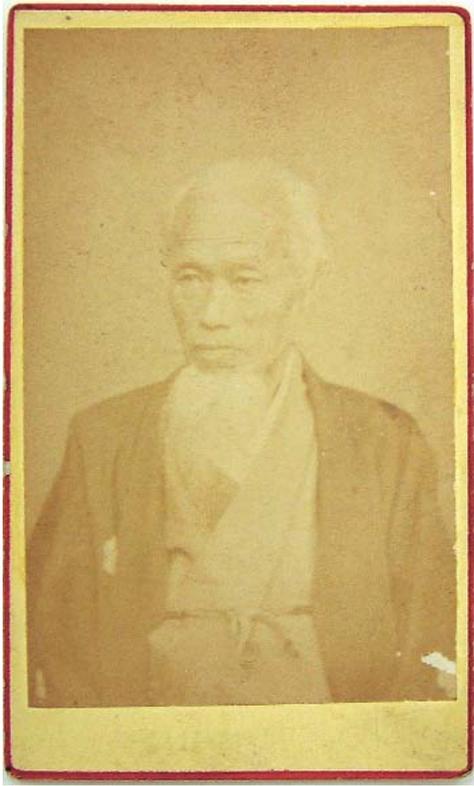
錦窠翁こと伊藤圭介は、1803年(享和3)、名古屋呉服町の医家に生まれ、長崎に遊学してシーボルトに師事したのち、『泰西本草名疏』(1829年)出版により、日本に初めて近代的な植物分類法を紹介するなど、わが国近代科学史上、大きな足跡を残しました。医家としても、名古屋で初めて種痘を実施したほか、尾張藩の洋学教育を主導したことで知られています。明治になってからは、名古屋大学の前身である医学校の設立に寄与するとともに、明治政府の要請による東京移住後は、小石川植物園に関係し、東京大学教授をつとめ、本邦最初の理学博士となりました。99歳で没するまで研究生活を続け、多数の著作・編纂物を残しました。

名古屋大学附属図書館には、その遺稿類のうち、「錦窠植物図説」など188冊が伊藤圭介文庫として所蔵されています。これらの資料は、伊藤圭介が名古屋大学の創設にかかわったことを機縁として、勝沼精蔵元総長はじめ関係各位のご尽力の結果、1955年(昭和30)ご遺族の伊藤一郎氏より寄贈されたものです。名古屋大学は、来年4月から設置形態が変わり、国立大学法人として新たな出発をいたしますが、それを前に、いわば生みの親ともいうべき伊藤圭介をふりかえり、記念展を開催することは大変意義深いものと思っております。

なお、伊藤圭介文庫は、これまでも文部科学省の科学研究費補助金などのサポートを受け、資料のデジタル化とホームページ上での一般公開を行ってまいりましたが、資料原本そのものの本格的な公開は、文字通り今回が初めての機会となります。そこで展示会では、全体の資料状況を可能な限りご紹介することに主眼をおき、それを通して伊藤圭介の人と学問に触れていただくよう企画しております。また、今回の記念展を機に、従来の電子展示に検索システムなどの機能を強化し、デジタル環境の整備もあわせて行っております。展示会とあわせ、名古屋大学構成員のみならず、広く市民の方々にも御覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の記念展示会・講演会開催にあたり、貴重な資料をご出品いただきました所蔵者の方々や講師の先生方、ご後援、ご協力いただきました関係各機関、各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

名古屋大学附属図書館長
同附属図書館研究開発室長
教授 伊藤 義人



1876年（明治9）10月23日 伊藤圭介73歳10月（自筆裏書）
（江馬家寄贈写真 / 名古屋市東山植物園所蔵）



1898年（明治31）96歳
伊藤篤太郎「理学博士伊藤圭介翁小伝」1898年（明治31）

伊藤圭介の人と学問

いまから200年前名古屋に生まれ、まだ近代自然科学が根付いていなかったわが国において、はじめて近代的植物分類法を紹介するという偉業をなしとげ、また名古屋大学の創設にもかかわった伊藤圭介とはいかなる人物だったのか。

花繞書屋かじょうしょおくと称したその書齋のまわりには文字通り、四面に奇草珍木を栽えて花をめぐらしていた。東海随一の蘭書の蔵書家と言われ、訪れた友人は「西書を堆く積て之を余に示す、圭介、温厚篤実、西洋本草に精し、実に海内の一と称すべし」(江馬活堂『藤渠漫筆』)と賛えている。

中国伝来の本草学と西洋の近代的博物学との統一をこころがけ、勤勉誠実な人柄で内外の研究者と積極的に交流した。柳河春三・田中芳男らすぐれた門人を育て、幕末から明治期、蕃書調所や維新政府に仕え、わが国の物産・博物研究の近代化を推進し、国際交流にも大きく貢献した。

1. 生い立ちと修学

圭介は、名は舜民のち清民、字は戴堯たいぎょう、通称圭介きんか たいこさんしゅう。錦窠・太古山樵などと号した。町医西山玄道の二男として1803年(享和3)1月名古屋呉服町に生まれる。父の実家伊藤家を嗣ぎ伊藤姓を名乗る。父について医学を修め、小野蘭山の門人水谷豊文について本草学を学ぶ。14、5歳の頃から父、実兄大河内存真や師豊文について尾・三・勢・志・濃・信の諸州を採薬。1820年(文政3)18歳で漢方医を開業するが、蘭方への転学を志し、翌年京都に遊学し、藤林普山について蘭学を学び、帰郷後の1823年には吉雄常三にも蘭学を学び、蘭方医となる。

1826年(文政9)豊文や兄存真らと共に、江戸参府途上のシーボルト(Philipp von Siebold)に熱田で会見。シーボルトの勧誘により、翌年長崎に遊学してシーボルトに師事し博物学などを学ぶ。帰郷後1828年頃、水谷豊文を盟主とする尾張の本草研究会・嘗百社の創立に参画する。

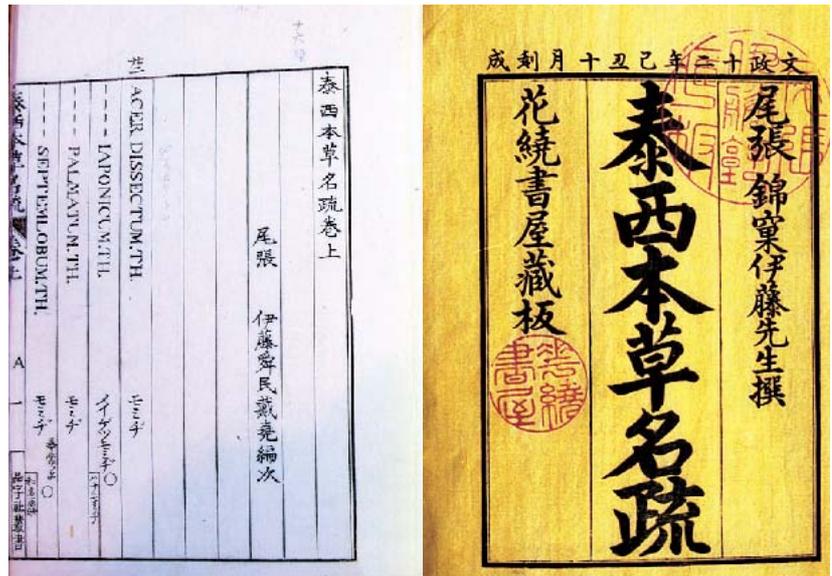


1 寺子屋時代の竹馬の友・森高雅が描いた伊藤圭介肖像画(名古屋市東山植物園所蔵)

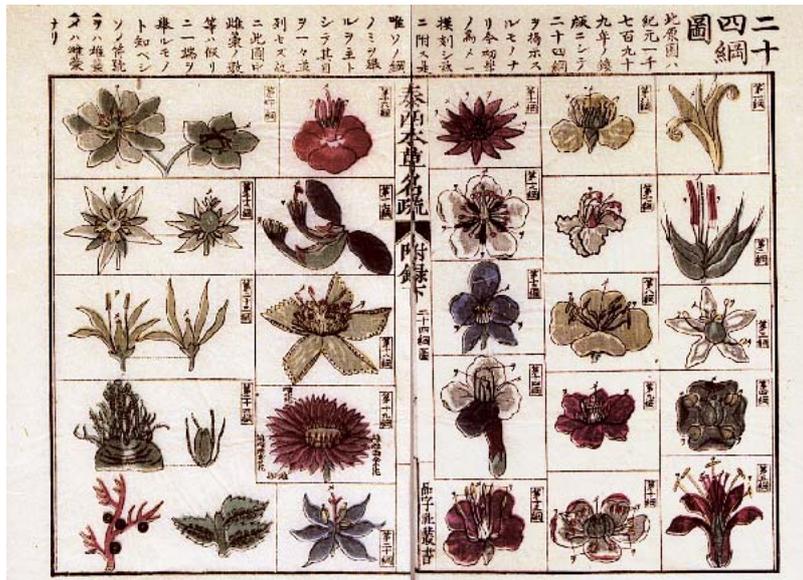
2. 『泰西本草名疏』の刊行

圭介は長崎においてシーボルトに植物分類を学んだとき、水谷豊文の『物品識名』とツユンベリー(C.P.Thunberg)の『日本植物誌』(Flora Japonica、1784)とを対照しつつ教えられた。1828年(文政11)3月圭介は長崎を去るに際して、シーボルトから餞別として『日本植物誌』を贈られ、帰郷後これに準拠して訳述編集したのが『泰西本草名疏』である。

『泰西本草名疏』は上下2巻、附録2巻、全4巻3冊で、1829年(文政12)圭介27歳のとき、花繞書屋蔵板、つまり私家蔵版として名古屋で刊行された。石黒済庵の叙、大河内存真の序、水谷豊文および吉雄常三の跋があ



2 泰西本草名疏・上巻 1829年(文政12)〔名古屋大学附属図書館所蔵〕



3 泰西本草名疏・附録「二十四綱図」(名古屋大学附属図書館所蔵)

り、シーボルト事件の最中で蘭学者にきびしい状況ながら嘗百社の師友に支えられてよく出版にこぎつけたことが窺われる。圭介の題言によれば、本邦の産物について西洋の本草説にもとづいた集成書をつくりたいとする初志があり、積年研鑽してついにその志を遂げることができたとある。圭介の立場は、もとより日本の本草学を否定するものではなく、それと泰西本草学(西洋博物学、植物学)との折衷を意図するものであった。本文は、ツウンベリーの本をもとに、植物710余種の学名(ラテン名)をアルファベット順に配列、それぞれに和名および漢名を考定している。漢名より和名を中心においているのは『物品識名』の影響である。上巻はA~F、下巻はG~Zに分ける。シーボルトの意見を数多く載せているが、シーボルト事件の筆禍を恐れて稚膽八郎^{わかい}の変名で暗示している。

附録下巻は、リンネの24綱分類法を本邦ではじめて体系的に紹介している。綱・目・属(圭介は類と訳した)・種の分類段階を説明し、さらに具体的に第1綱から第24綱までを詳述し、巻末に彩色の24綱図を掲げている(上図3参照)。これはミラー(J. Miller)の『リンネ雌雄蕊分類体系図』(An illustration of the sexual system of Linnaeus)

より採ったものとされる。

圭介は、『泰西本草名疏』訳述に際して、多くの植物学用語を創案した。そのうち、綱・目・類・種をはじめ雄花・雌花・雌雄両全花・雄蕊・雌蕊・花粉・花糸・絲頭・子床・実礎・変種などの訳語は圭介に始まるものとされる。これらの訳語は、宇田川榕菴の『植学啓原』や飯沼慾斎の『草木図説』にも大きな影響をあたえ、そのいくつかは今日も使用されている。

3. 町医より藩医へ

1837年(天保8) 諸国飢饉に際し、『救荒食物便覧』を刊行。その板木が藩によって借上げられ近傍諸国に頒布される。

翌年、江戸大火の復興用材伐採につき、病用手当として木曾に出張。木曾山中に採薬。1841年(同12)『嘆喆喇国種痘奇書』を校刻して牛痘法を紹介。1850年(嘉永3) 自宅に種痘所を設け、種痘施術を開始する。のち、大河内存真・石井隆庵とともに尾張藩種痘所の取締りを命ぜられる。1851年(嘉永4)『遠西硝石考』を訳述して藩主に献上、のちこれを『万宝叢書硝石篇』として刊行。

1859年(安政6) 57歳のとき尾張藩寄合医師に任ぜられ俸7口を受け、また洋学翻訳教授、さらに洋学館総裁心得となる。

4. 江戸・東京出仕後の圭介

1861年(文久元) 蕃書調所物産方に出役し、物産調査にあたる。再来日したシーボルトと再会。1863年(文久3) 蕃書調所の後身開成所を辞任し帰名。後事を門人田中芳男に託す。

1871年(明治4) 文部省出任を命ぜられ上京、文部少教授・編集権助などを歴任、『日本産物志』の編集に携わる。『日本産物志』は、圭介の物産研究の成果をあらわすもので、山城部・武蔵部・近江部・美濃部・信濃部の5部11冊が文部省から刊行され、そのほか壱岐・安房・遠江・阿波・陸奥・能登などの諸国部の稿本がつくられたが未完におわる。

1874年(明治7)『日本植物図説』草部イ初編を出版する。『日本植物図説』は、圭介著、圭介の三男謙編として自費出版した、圭介の植物研究の方法をもっともよく示す著書であった。

フランス人植物学者サパチエ(P.A.L.Savatier)の協力により自然分科の学名を記載しているが、植物をイロハ順に配列するという伝統的方法に従った。この書も謙が早世したためか、初編1冊のみで未完におわる。

1877年(明治10) 東京大学理学部員外教授に任ぜられ、主に小石川植物園で植物取調べに当たり、のち賀来飛霞と共編『小石川植物園草木図説』2冊を刊行する。1881年東京大学教授、1885年東大教授は非職となる。1888年理学博士



4 日本産物志・山城部 1873年(明治6)
(名古屋大学附属図書館所蔵)



5 日本植物図説・草部イ初編 1874年(明治7)
(名古屋市東山植物園所蔵)

の称号を受ける。1901年(明治34)東京にて病没、享年99歳。東京帝国大学名誉教授の称をうけ、男爵を授けられる。
(遠藤正治)

圭介肖像画の賛

森高雅が描いた圭介肖像画(図1)には、賛として圭介の50年前の旧作という七言絶句を掲げている。

東奔西走薬囊随 忙裏空過春尽時
藻思近来渾若洗 三句不有看花詩

賛を書いたのは80歳(1882年[明治15])の時とされるが、実は、これより3年前の1879年にもほぼ同様の詩文を大垣の江馬活堂に贈っている(右写真)。

50年前の圭介は、「東奔西走し薬囊随う」、医業と本草研究に忙殺され、薬袋を一時も手放せない多忙な日々を送っており、自室の壁上にこの詩を掲げて自らをなくさめていたという。

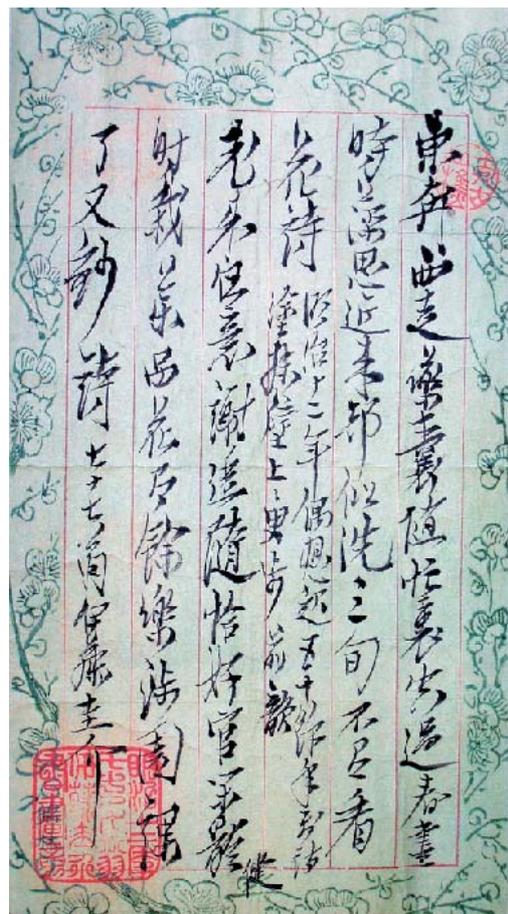
一方、1879年(明治12)ころの境遇を詩に託す。

老来任意謝追隨 恰好官閑體健時
栽薬品花有餘樂 涉園課了又鈔詩

東京大学理学部の員外教授として附属小石川植物園に勤務し、「薬品を栽ゆれば花に余楽あり」と植物研究のかたわら花を觀賞するゆとりある閑雅な日々がうたわれている。

50年前とは圭介の30代前後。冒頭の肖像画は『泰西本草名疏』出版直後の気力に満ちあふれた姿を伝える。

(遠藤正治)



伊藤圭介の明治12年詩文
岐阜県歴史資料館寄託・江馬家文書

圭介をめぐる人間群像

伊藤圭介の人生をふりかえるとき、1826年（文政9）熱田でのシーボルトとの出会いをはじめ、博物の探求を通して実にさまざまな人々と交流を重ね、豊かな人間関係を築いていったことがわかる。以下、国内外の関係者のなかから特に親交の深かった人々をとりあげ、「錦窠図譜」を中心に「錦窠翁日記」などの関連資料も参照しながら、「圭介をめぐる人間群像」を描いてみたい。

1. 国内の博物関係者との交流

みず たに ほう ぶん
水谷豊文（1779 - 1833）

1779年（安永8）、水谷覚夢の子として名古屋に生まれる。通称助六、字伯献、号鈎致堂。尾張藩士で初め馬廻組のち広敷詰。浅野春道と小野蘭山に本草を、野村立栄（初代）に蘭学を学ぶ。1805年（文化2）尾張藩薬園の責任者となった。本草学研究会の嘗百社を主宰し、伊藤圭介、大河内存真などを育てる。代表的な著作に『物品識名』、『物品識名拾遺』がある。

『錦窠植物図説』には、1883年（明治16）12月6日付の賀来飛霞書状で、「水谷豊文尾張人也、精本草当時無與比、常言本邦取自有梅從唐未然森山中有一谷（略）」との人物紹介がみられる。彼が育成した嘗百社の旺盛な活動ぶりは、豊文の死後三回忌追善に開かれた本草会の記録「乙未本草会物品目録」（1835年〔天保6〕）にも窺うことができる。



6 乙未本草会物品目録 1835年（天保6）
（名古屋大学附属図書館所蔵）



7 岩崎灌園「ツクバネウツギ」（写、錦窠植物図説・第71冊）



8

いわさき かんえん
岩崎灌園 (1786 - 1842)

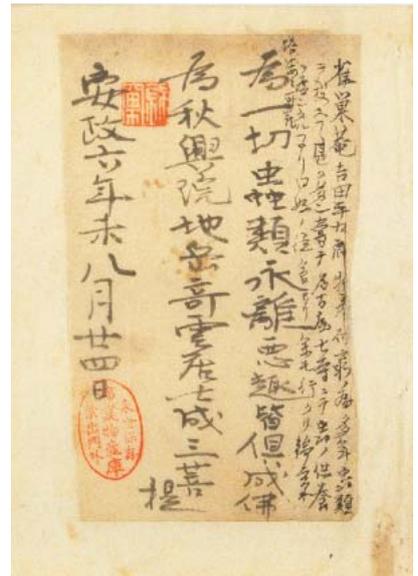
1786年(天明6)幕府徒士の家に生まれる。名は常正、通称玄通・源蔵(源三)、字士方、号灌園、堂号又玄堂。少年の頃から植物を好み、小野蘭山に師事する。江戸周辺や関東地方の植物を詳しく調査した。『本草図譜』が代表的な著作であるが、全96巻のうち6巻が刊行されただけで、残りは写本として伝わっている。

『錦窠植物図説』には60か所ほど朱で「灌」と記された『本草図譜』からの引用があるほか、『日光山草木図』からも50点ほどの植物画が集められている。灌園の肖像画8は、名古屋市東山植物園所蔵。

よしだ じやく そうあん
吉田雀巢庵 (1805 - 1859)

馬廻組・寄合組を勤めた尾張藩士で、通称平九郎、名は高憲。嘗百社の主要なメンバーで圭介と同門である。毎年正月25日各自が高憲の自宅に品物をもちよって研究会を開き、26・27日に一般公開した。とくに昆虫の研究にすぐれ、著作は精密な写生にもとづく図譜が主で、すべて稿本、写本のかたちで伝わっている。

『錦窠虫譜』には、吉田が物産研究のため多くの虫類を殺生したとして、1859年(安政6)七ツ寺で圭介らも加わり虫供養を行ったとの記事がみられる。また、『錦窠植物図説』には第64冊「千屈菜科 紫薇譜」に「庚申三月廿五日於七寺為雀巢庵吉田先生追薦 博物会」と出ている。



9 吉田雀巢庵の虫供養
(錦窠虫譜・第6冊)

はつとり せつ さい
服部雪斎 (1807 - ?)

1807年(文化4)生。関根雲停と並び称される博物画の名手で『本草綱目啓蒙図譜』や『目八譜』で名高く、また明治初年には博物局編『動物画』、伊藤圭介著『日本産物志前編』などの絵を描いている。しかし幕末までの経歴はよくわからない。福山藩あるいは岸和田藩の絵師だったということが断定はできない。没年も不明だが、1888年(明治21)82才のときの描画が『服部雪斎自筆写生帖』に残る。

『錦窠植物図説』には4か所ほど載っているが、すべて挿し絵の作者としてである。第13冊「秦槭譜」には「亡友服部雪翁筆」とある。



10 服部雪斎「コショウノキ」
(錦窠植物図説・第13冊)



11

か く ひ か (1815 - 1894) ・ ま い ち ろ う (1799 - 1857)
賀来飛霞 (1815 - 1894) ・ 佐一郎 (1799 - 1857)

1815年(文化12)豊後国高田に生まれる。名は睦之・弘之、通称睦三郎、字季和、号飛霞・百花山荘。父有軒は小野蘭山の弟子で、飛霞は帆足万里に医を、山本亡羊に本草を学ぶ。油布嶽や日向の採葉記を残し、明治維新後、伊藤圭介の勧めで東京大学小石川植物園に勤務し、彼の助手となった。

1894年(明治27)没、年79。

飛霞の兄佐一郎(佐之)も本草家・医師。長崎で圭介と同時期シーボルトに学び、親しくしていた。圭介が『泰西本草名疏』を著す際、協力している。

『錦窠植物図説』には飛霞が十数か所、佐一郎が数か所、ほかに「賀来氏」が数か所出てくる。内容としては、飛霞は書状(1878年[明治11])や彼の説の紹介、写図など、佐一郎は第62冊「石榴科桃金嬢」の画に「天保壬辰仲冬、豊前・賀来佐之識」とある。飛霞の写真11は、名古屋市東山植物園所蔵。



12 賀来佐一郎遺稿
(錦窠植物図説・第108冊)



13

く り も と じ ゃ う ん (1822 - 1897)
栗本鋤雲 (1822 - 1897)

1848年(嘉永元)、幕医栗本昌当の養子として跡を継ぐ。喜多村直(槐園)の実子で名は鯤、通称哲三・瀬兵衛・瑞見(六代)、字化鵬、号匏・鋤雲、安芸守。医学を多紀元堅、本草を曲直瀬養安院正貞に学ぶ。外国奉行・箱館奉行を歴任、明治維新後は報知新聞主筆、東京学士会院会員となる。伊藤圭介とは明治政府出仕後、親しくなる。1897年(明治30)没、年76。

『錦窠植物図説』には3か所ほど出ており、一つは彼の説を紹介している。鋤雲の写真13は、続日本史籍協会叢書『匏庵遺稿』1(1900年)所収。



14

た な か よ し お (1838 - 1916)
田中芳男 (1838 - 1916)

1838年(天保9)信州飯田に生まれる。伊藤圭介の弟子となり、ともに江戸に出て蕃書調所に出仕。圭介退職後も開成物産所に出仕し、1867年(慶応3)にはパリの万国博覧会に参加する。維新後は博物局の中樞となり、博物・物産学の啓蒙、殖産興業に努める。1916年(大正5)没、年79。

『錦窠植物図説』には50か所以上載っており、圭介の筆頭の弟子であることを再認識させられる。その多くが圭介宛の書状(一部電報)で、学問上の意見を述べている。年月日がわかるものは1880年(明治13)から1897年(明治30)と

幅が広い。田中の写真14は名古屋市東山植物園所蔵。



15 田中芳男書状 / 1886年(明治19)2月17日付
(錦窠植物図説・第20冊)



16 小野職愨書状 / 1880年(明治13)9月
(錦窠植物図説・第83冊)



17

お の もと よし
小野 職愨 (1838 - 1890)

1838年(天保9)生。職愨は名、通称苓庵、号薫山。小野職孝(初代薫畝)の子が職実(二代薫畝)で、職実の子が職愨である。したがって、職孝の孫だが、従来誤って職孝の息子とされた。職愨は1861年(文久元)の幕府による小笠原探検に幕医として加わり、明治維新後は供物局にあって、田中芳男とともに新知識の普及につとめた。伊藤圭介は明治政府出仕後、職愨と親しく交流した。1890年(明治23)没、年53。

『錦窠植物図説』には「小野」を含め30か所ほど載っている。第83冊「齊墩果科」に1880年(明治13)9月付の圭介あての書状がある。それ以外はほとんど1882年(明治15)に彼が北海道で採った植物の腊葉標本である。小野の写真17は、名古屋市東山植物園所蔵。



18

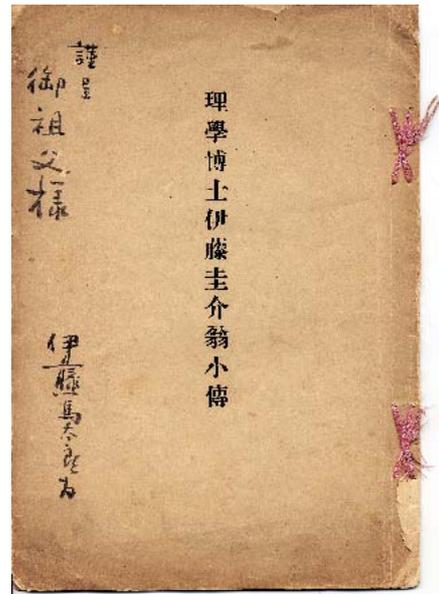
い とう とく た ろう
伊藤 篤太郎 (1865 - 1941)

1865年(慶応元)生まれる。伊藤圭介の娘小春と養子延吉の子で、1872年(明治5)東京に出て祖父圭介に学んだ。圭介の学業を助け、彼の学問上の後継者となった。圭介の『錦窠植物図説』は篤太郎の助けを得て整理、製本したものである。英国のケンブリッジ大学に留学し、のちに理学博士、東北帝国大学理学部勤務となった。1941年(昭和16)没。

『錦窠植物図説』には20か所ほど出ており、多くは篤太郎が自分の説を述べたものである。年月日がわかるものでは1888年(明治21)と1896年(明治29)がある。例として第30冊「槭樹科」には「伊藤篤太郎按ニクスノキバナカヘデ *Acer oblongum*, Wall ナリ、琉球二産ス」とある。篤太郎の写真18は、名古屋市東山植物園所蔵。(種田祐司)



19 伊藤篤太郎書付(錦窠植物図説・第30冊)



20 理学博士伊藤圭介翁小伝 / 1898年(明治31) 6月圭介に謹呈された孫篤太郎による圭介略伝である。(名古屋大学附属図書館所蔵)

2. 来日した外国人と伊藤圭介の交流

明治政府に出仕して以降、圭介の日記(名古屋市東山植物園所蔵、以下「日記」と表記)には、外国人と学際的交流を行った様子が散見される。これまで圭介と外国人の交際といえば、シーボルトばかりが目立ってきたが、それ以外にも多数の外国人との交流が確認できる。何より圭介は、シーボルトの著書によってヨーロッパでは知られた存在であり、日本を訪れる自然誌研究者らは、いまなお健在であるその「圭介」本人との学際的交流を期待し、接近を図ったのであった。以下、交際頻度もしくは圭介へ与えた影響を考慮して、サヴァチエ、ノルデンショルト、マッカーティー、張斯桂、ヘルツ、アーネスト・サトウをとりあげ、各人の略歴とその交際状況を概観しておく。



21

サヴァチエ (Savatier, Paul Amedee Ludovic 1830 - 1891)

お雇い外国人サヴァチエとの交際については、日本科学史上重要な位置づけがなされている(竹中1997)。1830年10月19日フランスのサン・ジオルジ・ドレロンに生れたサヴァチエは、医学を学んだ後中国へ渡り、帰国後ロシュフォール造船所の一等医官勤務を経て、横須賀造船所医師として1865年来日した。以後1875年(明治8)12月に任期満了し、1876年1月18日に離日したが、同人がA.フランシェとともに著した『日本に自生の植物目録』(“Enumeratio plantarum in Japonica sponte crescentium”)は、日本の植物を体系的に紹介した書物として、今日でも高い評価を得ている。

このサヴァチエとの交際の始まりは、ちょうど「日記」が現存しない時期にあたるため定かでないが、その後、静養のため一時帰国していたサヴァチエが再来日する1873年(明治6)1月からは、「日記」から交際の様子を窺うことができる。このとき、圭介とサヴァチエの間を取り持ったのは、富岡製糸場のお雇い外国人クラマーであった。4月9日、クラマーと同道したサヴァチエに会した圭介は、翌日両人と博覧会を見学している。そこで圭介は、彼と子息謙の共著『日本植物図説 草部イ初編』の序文をサヴァチエに依頼し、かつ、「西洋之名何卒御

吟味、御考之義八御書入可被下候」とも懇望している（「日記」同年12月4日）。圭介は、自然物の西洋での名称について、外国人、とりわけ西欧の専門家の意見を徴したかったものと思われる。このことは、「日記」1874年（明治7）11月28日のサヴァチェ宛圭介書簡からも窺えるが、念の入ったことに圭介は、「若難相分品八仏国ノフランシェー君へ御送り」と、サヴァチェの共著者の助けまで借りようとしている。

ともあれ、「日記」によれば、「クラマ来、サバチール江植物図説十一枚カ十二枚見せる」（1874年〔明治7〕1月16日）、「サバチール、クラマ来訪、沙より仏産腊葉三百種恵ミ呉ル」（同年1月21日）と、クラマーの周旋による圭介とサヴァチェの交際は以後も順調に続き、同年11月19日、横浜のサヴァチェを訪問した折、「植物図説校合摺相渡、題名并叙文ヲ託」したのである。現在、『日本植物図説 草部イ初編』でみるサヴァチェ序文は、こうして得られたのであった。サヴァチェの写真21は、名古屋市東山植物園所蔵。



22

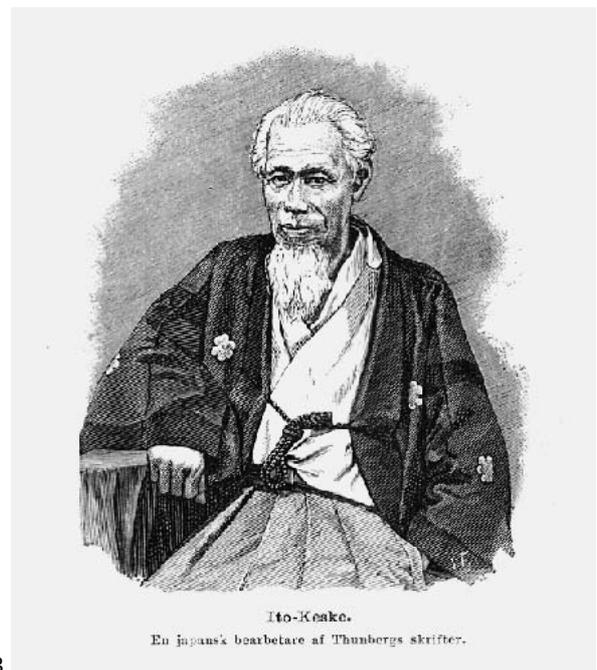
ノルデンショルト（Nordenskiöld, Nils Adolf Erik 1832 - 1901）

ノルデンショルトとの交際は、サヴァチェの場合とは異なり、長らく忘れ去られていた。ノルデンショルトは、ロシア統治下のフィンランド、ヘルシンキに生れ、ヘルシンキ大学で学んだが、反ロシア的なスピーチをしたとして国外追放を受け、スウェーデンに移住している。その後、ストックホルム王立自然科学博物館鉱物部の主任研究員を経て同国に帰化する。彼の学識をいかにスウェーデンが評価したかは、同国の資金で彼を北極探検隊長とし、ヴェガ号で世界を周遊させたことを述べれば十分であろう。そしてこの周遊の途中、ヴェガ号は横浜に停泊するが、そこ

で彼は圭介とも面会している。

1879年（明治12）10月10日、圭介は孫篤（のちの篤太郎）と従者の独峰を従え汽車で横浜へ行き、オランダ人ヘルツの手引きによりホテルでノルデンショルトと対面、さらにヴェガ号に乗船して専門家から押葉についての質問を受けるのである。圭介一行は、その後異人館を散策し、汽車で同日21時に帰宅するという忙しい一日を過ごしている。この10月10日の圭介の行動は、さっそく孫篤の手で回想録にまとめられ、圭介と知己であった栗本鋤雲の関係する「郵便報知新聞」12月11日号に掲載されたため、多くの人の知るところとなった。なお、この面会・交流は、圭介のもつ博識さを引き出す形で進められたようである。世界調査を主目的としているヴェガ号は、その寄港地の天然物についても気を配っており、ヘルツは、日本における植物鑑定の最高峰として圭介をスウェーデン側に紹介した節がある。

「日記」によれば、圭介は『日本産物志 信濃部』とともに自身の写真を贈ったらしく、ノルデンショルトが帰国後に出版した『ヴェガ号航海誌』にも、圭介の画像（図23）が掲載されている（ノルデンショルトの写真22も同書による）。そしてこの対談の成果であろう、11月23日の日記には、「横浜ゲールツ来、スウェーデンアカデミーよりメダル来着二付届被呉、并ノルデンウエー北洋通航之銅メダイルも到来」とあり、スウェーデンからメダルを贈られるにいたったのである。メダル授与には、日本で初めてスウェーデン人リンネによる分類法を紹介した『泰西本草名疏』刊行への評価も含まれていたであろう。なお、残念ながらこのメダルは、1888年（明治21）10月24日盗難に遭ったため現存していない。



23



24

マッカーティ (McCartee, Divie Bethune 1820 - 1900)

アメリカ合衆国ペンシルバニア州に生れ、コロンビア大学およびペンシルバニア大学に学び MD を取得したマッカーティは、1843年中国に派遣された後、同地の副領事を経て1872年(明治5)来日し、第一学区第一番中学、そして同校を改称した開成学校で英語、博物学、ラテン語を教えた。「日記」には、「今日出門、植物園出勤、帰途二加賀邸、方文部省御用地之杭アル場所西へ入式軒目、米人マカティへ寄ル、此人支那長ク滞留、但北京二八不行ト云」(1875年[明治8]6月27日)とあるのが初見で、二人はこの頃出会った可能性が高い。マッカーティは中国語と博物学に通じており、また、小石川植物園の整備と図書館の設立にも尽力したことから、圭介とも頻繁に交流するようになっていった。恐らく彼らは、漢字を交えた筆談により意志の疎通を図っていたものと推察される。1877年(明治10)5月、マッカーティが中国に戻る際には、圭介自ら送別会にも参加している。なお、マッカーティは1887年(明治20)に再来日するが、9月4日、12日の両日にわたって圭介との再会を果たし、旧交をあたためたのであった。マッカーティ夫妻の写真24は、渡辺正雄『増訂 お雇い米国人科学教師』(1996年)による。

張 斯 桂 (1812? - ?)

1870年(明治3)、伊達宗城と李鴻章との間で日清修好条規が調印され、73年に批准書を交換して発効した。その結果、日本は翌年、柳原前光を特命公使として北京に送った。中国側から公使団が出発したのは77年の秋になってからで、一行が芝山内の月界院を公使館としてあてたのは、明けて78年1月末であった。以後、第一次公使館員は82年(明治15)までの任期を勤めることになるが、この中で副公使をつとめたのが張斯桂である(任期:1877~81年)。圭介は、公使の何如璋とも交渉をもったが、頻繁に交際したのは副公使の張であった。張は、同文館総教習であった W.A.Martin の著『万国公法』の序文を書いた人物として知られるが、その足跡は不明な部分が多く、日本滞在中の詩文を介した記録『使東詩録』の検討等、今後の精査が必要である。

圭介が張斯桂と交際する契機となったのは、息謙と出版した『日本植物図説 草部イ初編』の序文を、マッカーティを介して張斯桂に依頼したことであろう(伊藤圭介「日本植物図説序」『洋々社談』第37号、1877年)。しかし、「日記」でみる限り、両者の関係が本格化するのは、月界院が公使館となる1878年1月以降である。例えば1月26日には、マッカーティと張の訪問を受けており、逆に2月12日には、公使何如璋ならびに副公使張を訪問し、さらに2月17日には、篤太郎と画工中嶋梅仙などを連れ張との対話に臨むなど、急速に関係を深めていく様子が窺える。圭介の「日記」や編纂物である「植物図説雑纂」(国会図書館、名古屋市東山植物園)、「錦窠植物図説」(国会図書館、名古屋大学附属図書館)などの中には、同じ漢字を使う国である日本と中国との間で、言葉を交わすことはできずとも、筆談をもって意志の疎通を図っていた様子が読み取れる資料がある。その文面からすると、圭介が張に期待したのは、同人がもつ中国文献についての知識であったようである。最後の本草学者ともいえる伊藤圭介は、その手法として、物産について古今東西の書物に記された知識を集積することを常としていた。その意味で、中国の文人官吏張との交際は、裨益するところ大であったろう。なお張は、「日記」の存在しない1882年(明治15)1月~5月の間に帰国



25 張斯桂との共作(錦窠植物図説・第29冊)

したらしく、二人の別れについては詳細を知り得ないが、その後の「日記」には、できあがった自著を中国の張に贈ろうとする様子も散見され、二人の親密な関係を窺うことができる。



26

ヘールツ (Geerts, Anton Johannes Cornelius 1843 - 1883)

圭介が交際した外国人のなかで、もっとも親密な関係を築いたのは、オランダ人ヘールツであった。ヘールツは、オランダのウーデンダイクに生れ、ユトレヒト軍医学校の化学担当教官を経て1869年(明治2)に来日し、ハラタマの後任者として長崎医学校で1875年まで理化学教師を勤める。以後、京都司薬場監督から横浜司薬場へと転任し、1883年8月30日に横浜で没した。(ヘールツの写真26は、『国立衛生試験所百年史』[1975年]による)

二人の交際は、ヘールツが横浜に移ってからのようであるが、「日記」からすると、76年(明治9)10月、ヘールツを管理する内務省衛生局に勤務していた緒方暢之の仲介が端緒となった可能性が高い。圭介は、ヘールツが着手していた『日本薬局方』の原稿に柴田承桂とともに目を通すなど、ヘールツの仕事に陰ながら協力した様子が窺える。その際、日本の薬物について膨大な知識を有する圭介は、その校閲候補としてすぐに名が挙がったことであろう。ましてや、その編纂を手伝う緒方暢之の父賀来飛霞は、圭介の助手を務めていた入魂の間柄であるから、圭介とヘールツが交際を親密化させるのは時間の問題であったかもしれない。圭介はヘールツ亡き後もその婦人「キワ」を訪ねるなど気遣いを見せており、やはり二人には通じ合える何かがあったのであろう。



27

アーネスト・サトウ (Satow, Sir Ernest Mason 1843 - 1929)

最後に、江戸から明治にかけて来日した外国人のうち、最も著名な人物の一人、アーネスト・サトウと圭介の交際をみておきたい。

イギリス、ロンドン生まれのサトウは、初等教育を終えロンドン郊外のミル・スクール(1856 - 1859)を主席で卒業後、ユニバーシティ・カレッジに進学する。1861年6月に中国及び日本に勤務する通訳生の募集に応募し、試験での合格を経て、同年11月にイギリスを出発し、さらに北京で中国語を学んでいる。1862年(文久2)9月横浜に到着。江戸品川東禅寺のイギリス公使館で任

務を開始する。以後書記官となり、1884年一旦シャム総領事となるが、1895年日本公使に昇進し、1900年から1905年まで駐支公使を勤める(サトウの写真27は、横浜開港資料館編『図説アーネスト・サトウ』[2001年]による)。

圭介との接点については不明な点が多いが、「日記」からは、1877年(明治10)には既に交際していたことが読み取れる。同年11月11日、サトウから午餐に招かれた圭介は、「サトウ今般一辞書編纂二付、植物之洋名吟味被頼承知致遣ス」と記しており、やはりサトウも、これまで見てきた外国人研究者同様、圭介に対し植物の名称吟味を期待していたことがわかる。また幕府時代から日本のことを知るサトウは、日本を訪問する外国人から頼りにされることが多かったとみえ、圭介を紹介することもあったようである。1877年12月12日の「日記」には、「英人サトウ并(マ、)来訪、同人本草家二而是より香港へ、夫より支那内地採薬、又五月日本へ来候旨、其節押葉実等致承候筈」とある如く、日本での植物鑑定の最高峰として、サトウが圭介への仲介をしていた様子がみえている。1878年4月7日の「日記」にある「英人サトウ来訪、独逸国之ラインより植物ノ名質問来り、夫々取調へ書付遣ス」との記事は、このことを端的に示している。

圭介は、上記の人物以外にも、アールブルク、ウエイキマン、ブライヤ、ヒルゲン・ドルフ、デビット・モルレイなど、多くの著名な来日外国人と学際的な交流をもったが、ここでは紙数の関係上、割愛した。(土井康弘)

錦窠図譜に見る伊藤圭介の蔵書印

蔵書印は、その所蔵者を明らかにするために書物に押した印影である。

錦窠図譜を見ると、各丁にわたり押印されていたり、冊子によっては、1丁に数箇の蔵書印が押されているものもある。(下記の印影の中で、「太古山樵」のみ「草木名鑑」にある印影である。)

伊藤圭介の蔵書印は、80種以上あると言われ、同時代の学者や文人と比べると多い。特に、年齢がある印を毎年作って使っており、錦窠図譜にも、75歳から97歳までの印影がある。

各冊子の巻首に「禁出門外」と大書していることと考え合わせると、圭介の自分の手稿本に対する強い愛着が窺われる。(蒲生英博)



明治十年
伊藤圭介
書画記



九十一翁



九十二翁



九十三翁



九十四翁



九十五翁錦窠



我齡九十五



九十七翁



錦窠



錦窠



錦窠



錦窠



錦窠



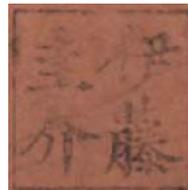
圭介



伊藤圭介



伊藤圭介



伊藤圭介



太古山樵



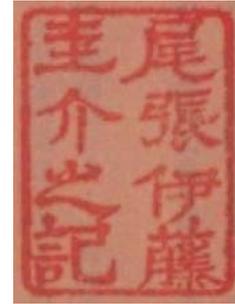
清民



永世保存
錦窠物産庫
禁出門外



尾張伊藤氏記



尾張伊藤圭介之記



華繞書屋

(印は、すべて原寸大)



圭介最晩年の二行書

この書は、1899年(明治32)1月1日に揮毫された圭介最晩年の七言二行書である(個人蔵)。「幽禽不見但聞語 野草無名静着花(幽禽見えず但語るを聞く 野草は無名にして静かに花を着ける)」とある。詩歌はその作成時の状況をよく表す。若かりし頃の心境は、本図録「伊藤圭介の人と学問」の項で遠藤正治氏が述べているように、「東奔西走薬囊随 忙裏空過春尽時 藻思近来都似洗 三句不有看花詩」であり、まさに医療・医学あるいは博物学に没頭し、飛び回っていたことが窺える。

一方、晩年になると「烏兔疾如矢」の揮毫が多くなる。長寿だからこそ年月の疾さを感じるようになったのであろうか。ここにあげた二行書では、この花は何、この草は何、この鳥は云々と山野を巡り、あるいは内外の学者と論戦を交わしていたことは過去のことになってしまった。鳥禽も草木も自然のままに良いとの心境の変化を表していると考えたい。なお、晩年の圭介は右肘を畳につけて筆を運んでいたため、書が左に傾いているのが特徴である。(山内一信)

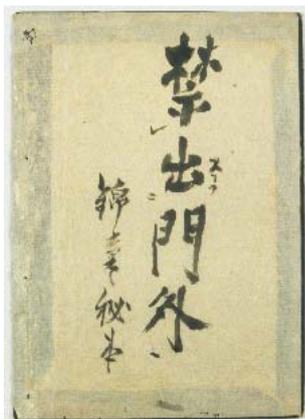
植物へのまなざし

幕末から明治にかけて活躍した有数な博物学者であった圭介は、動物や鉱物など、自然界の物産に広く通じていた。なかでも、圭介がとくに情熱を注いだのは植物学であり、植物に対する飽くなき興味や研究への熱意は、彼が残した『錦窠植物図説』からも窺い知ることが出来る。

「錦窠植物図説」とは？

『錦窠植物図説』は、おもに樹木に関して、圭介が記載をしたり資料を集めて掲載した、圭介編著、とでもいふべき書である。これが作られたのは、1893年(明治26)から1897年(明治30)にかけて、圭介90歳前半の頃といわれ、彼が晩年、その人生を賭して研究してきた植物に関する知識を、可能な限り残そうと著したものとされる。いずれは何かの形で公表したいと考えていたようだが、それまでは「門外不出」を命じた、いわば秘本であった。結局、彼の存命中も、またその後、現在に至るまで、この書が出版されることはなかった。

『錦窠植物図説』は全部で164冊あったと思われるが、本図書館が所蔵しているのは、そのうちの144冊である。残りの多くは、国立国会図書館支部上野図書館に納められている。なお、本図書館の『伊藤圭介文庫』は全部で188冊の稿本からなるが、この『錦窠植物図説』は、その中心を占める書といってよいであろう。



28 『錦窠植物図説』第2冊の表紙と第1冊の中表紙、第32冊の中表紙である。圭介の字で、「門外へ出すことを禁ず、錦窠秘本」「余宿志を継ぎ……上梓を期すべき也」と書かれている。

以下に、この『錦窠植物図説』に見られるいくつかの特徴を挙げる。これらの特徴からも、彼の植物に対する情熱や知識がいかに深いものであったか想像されよう。



29 フヨウ(第8冊)



30 ツバキ(第5冊)

『錦窠植物図説』には多くの植物が描かれているが、出典や描き手が不明なものも多い。

1. 斬新だった「自然の体系」による構成

圭介の著作には、植物の順番をイロハ順に並べたものも多いが、『錦窠植物図説』を作るに際しては、西洋の分類体系に基づいた順番に並べた。つまり、それぞれの植物の種を「科」という大きなグループにまとめ、その上で、それぞれの科の順番を、当時考えられていた「自然の体系」に従って並べている(表1)。圭介は、孫の篤太郎を私費でイギリスのケンブリッジ大学に留学させたが、その際、篤太郎から植物分類学に関する最新の研究状況を得ようとした。その成果が、『錦窠植物図説』の目次は、ベンサム Bentham とフッカー Hooker が19世紀後半に出版した分類体系の順番にほぼ倣っている。圭介は、水谷豊文やシーボルトという、日・欧を代表する優れた研究者を師と仰いだ。イロハ順に植物が並ぶ書物を著すかたわらで西洋の分類体系に基づく図説を作った彼の心には、日本の本草学と西洋科学の融和という、大志が隠れていたのかもしれない。

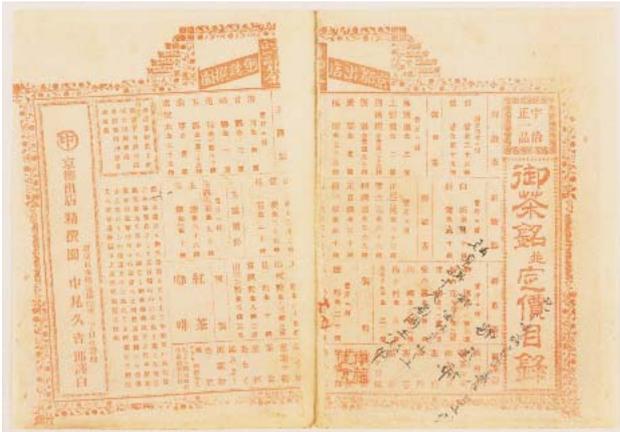
表1. 『錦窠植物図説』の目録

冊	目録の科名	現在の科名			
1	聖柳科	ギョリュウ科	80	紫金牛科	ヤブコウジ科
2	金糸桃科	オトギリソウ科	81~82	柿樹科	カキノキ科
3~7	山茶科	ツバキ科	83	斉墩果科	ハイノキ・エゴノキ科
8~9	錦葵科	アオイ科	84	素馨科	モクセイ科
10	梧桐科	アオギリ科・パンヤ科	85~89	狗骨科	モクセイ科
11	菩提樹科	シナノキ科・ホルトノキ科	90	馬錢科	フジウツギ科
12	酢漿科	アオギリ科・パンヤ科	91	茄科	ナス科
13	秦椒科	ミカン科	92	玄参科	ノウゼンカズラ科
14	芸香科	ミカン科	93	紫葳科	ノウゼンカズラ科
15~21	橙橘科	ミカン科	94~97	樟科	クスノキ科
22	黄楝樹科	ニガキ科	98	瑞香科	ジンチョウゲ科
23	楝科	センダン科	99	胡頹子科	グミ科
24~25	冬青科	モチノキ科	100	寄生科	ヤドリギ科
26	衛矛科	ニシキギ科	101	檀香科	ビャクダン科
27	鼠李科	クロウメモドキ科	102	黄楊科	ツゲ科
28~29	無患樹科	ムクロジ科	103~104	大戟科	トウダイグサ科
30~33	槭樹科	カエデ科	105	榆科	ニレ科
34~35	漆樹科	ウルシ科	106	榆科擲譜	ニレ科
36	木本鉤吻科	ドクウツギ	107	蓴麻科	クワ科
37~38	豆科	マメ科	108~109	桑科	クワ科
39	合歡譜	マメ科	110	無花果科	クワ科
40~56	薔薇科	バラ科	111	胡桃科	クルミ科
57~58	虎耳草科	アジサイ科	112	楊梅譜	ヤマモモ科
59	疏科	ユキノシタ科	113	殼斗科樅木科	カバノキ科
60	蔦科	ユキノシタ科	114~119	殼斗科	ブナ科
61	金縷梅科	マンサク科	120	栗科	ブナ科
62~63	石榴科	ザクロ科・フトモモ・サガリバナ科	121	蕁荑科	ブナ科
64	千屈菜科	ミソハギ科	122~125	楊柳科	ヤナギ科
65	五加科	ウコギ科	126	鳳梨科	タコノキ科
66	青葙科	ミズキ科	127~129	棕櫚科	ヤシ
67~68	山茱萸科	ミズキ・ユリノキ科	130~140	松柏科	ヒノキ科、イチイ科、イガヤ科、イチヨウ科、マキ科、マツ科
69~72	忍冬科	スイカズラ・アカネ科	141	蘇鉄科	ソテツ科
73~79	石南科	ツツジ・リョウブ・ガンコウラン・ヤツコウジ科	142~143	楮譜	(紙見本)
			144	雜纂	(草本など)

注) 左は図説の目録で圭介によって使われた科名。右は、それぞれの目録で扱われている植物の現在の科名。当時の西洋の分類体系に倣っている。

2. モモ缶ラベルまで貼り付けた知識欲

『錦窠植物図説』には、圭介が植物を研究するに際して収集した、実にさまざまな資料が添付されている。そこには、岩崎灌園をはじめとする先人の図譜や文献を転写したものが数多く見られるが、広告の切り抜きなど、身近な素材から取り上げたものも少なくない。例えば、チャの項には、お茶の価格表や宣伝紙が20枚以上切り抜かれて貼られているし、モモの項には、舶来のモモ缶のラベルを丁寧にはがして貼り付けてある。また、図説の最後の方には特別に「楮譜」を設け、清国の紙見本を500枚近く貼り付けた資料も収集している。植物に関する事柄であれば、茶の値段だろうが舶来の缶詰であろうが紙の見本であろうが、何でも吸収してやろうという、彼の飽くなき探求心が感じられる。



31 御茶銘並定価目録（第7冊）
貼り付けられた価格表や宣伝紙の中には、緑茶をはじめ、紅茶やコーヒーなどの項目も見られる。



32 モモの缶詰ラベル（第45冊）
舶来のモモの缶詰のラベルを、丁寧にはがして貼り付けてある。

3. 「辺境」の植物への興味

圭介は、北海道や沖縄や小笠原など、当時は「辺境」と考えられていた土地に根付く植物について、多大な好奇心を持っていたようである。彼は幕末、幕府の蕃書調所という外国語や科学研究に関する役所に、植物や動物や鉱物などの「物産」を研究する立場で勤務していた。そして当時から、北海道調査の第一人者である松浦武四郎や、小笠原調査の第一陣を切った宮本元道らと親しく、これらの地域に育つ植物に関する情報や標本を入手しようと努力していた。

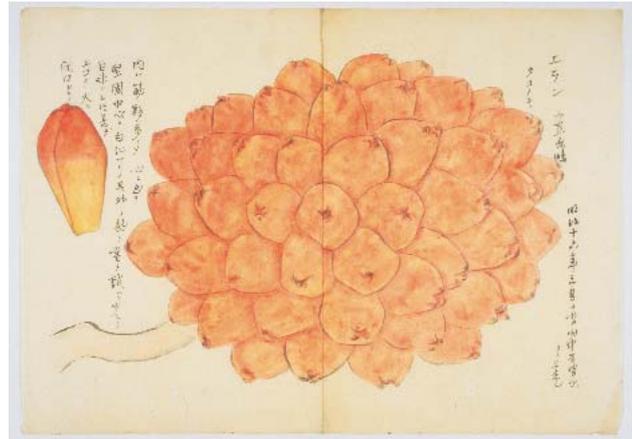
その頃から抱いていたであろう「辺境」の植物への関心の高さは、『錦窠植物図説』でも窺うことができる。図説内の、植物の分布に関する記述には、北海道や沖縄などの情報も多く盛り込まれている。また、北海道のみに分布する植物の紹介はもちろん、小笠原産や沖縄産の植物の描写も見ることができる。これら、さりげなく書かれているように見える植物には、圭介の地方の植物に対する知識の深さが織り込まれている。



33 エゾスグリ（第60冊）
ユキノシタ科の落葉低木で、北海道、南千島、樺太の山地に生育する。「スグリ」は「酸っぱい塊（くり）」の意味で、実は食べられる。



34 パンジロウ (第63冊)
フトモモ科に属する熱帯アメリカ原産の低木で、17世紀頃、沖縄に渡来した。別名グアバ。実がザクロに似ているため、パンザクロという別名もある。



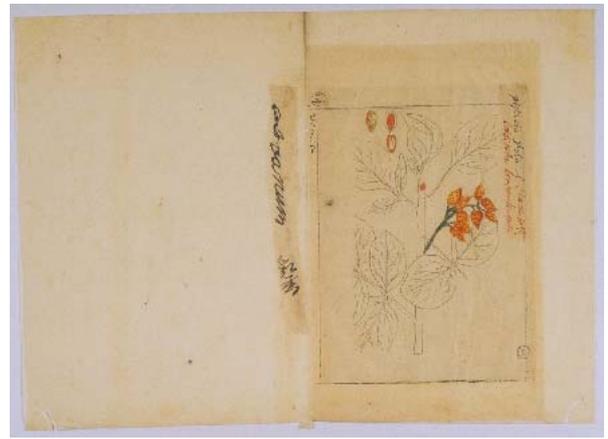
35 タコノキ (第126冊)
タコノキは単子葉のタコノキ科に属する樹木で、小笠原に固有の植物。10月頃、パイナップルのような実をつける。

4. より未知の世界へ - 異国の植物への関心 -

圭介の未知の植物に対する関心は、日本国内にとどまらず、世界へと広がっていた。1827年(文政10)の頃から、圭介は尾張の本草学研究会である「嘗百社」の同士たちと展示会を開いているが、そこにはインド産やマレー産の植物標本が展示されることもあった。これらの標本はシーボルトから贈られたものなどだったが、まだ30歳前後だった若き圭介の、異国の植物への興味を駆り立てたに違いない。また、後に勤めた蕃書調所では、東インドやジャワの植物に関する文献も揃っていたらしく、これらの植物に関する彼の知識を深めたことだろう。このように、長年あたためた異国の植物への情熱は、『錦窠植物図説』にも各所で見ることができる(図36~38)。



36 レイシ (第29冊)
ムクロジ科に属する常緑の小高木で、中国南部、ベトナム、ビルマに自生する。楊貴妃が好んだとされる果実のほか、根、葉、果皮、種子は鎮痛剤などに使え、また、材も緻密で道具類に使われる。

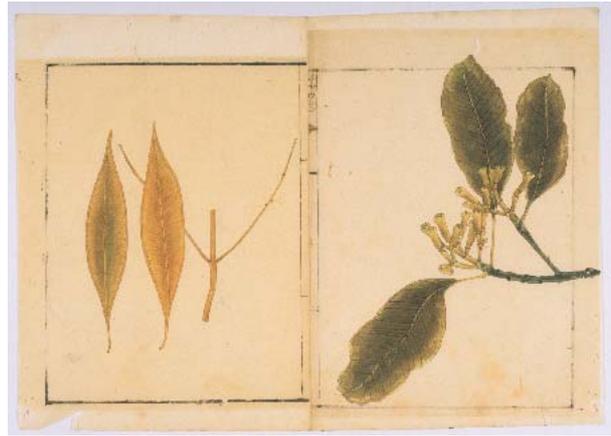


37 ピスタチオ (第35冊)
ウルシ科に属する、中央アジアから西アジア原産の落葉樹。1世紀にローマに渡来し、その後、ヨーロッパや北アフリカで広く栽培されるようになった。

5. 尾張と西洋の知恵「印葉図」

『錦窠植物図説』を飾る図の中でも印象的なのは、「印葉図」である。圭介は水谷豊文の死後、33歳の若さで尾張の本草学研究会「嘗百社」を引き継いだ。その嘗百社がよく用いた植物の記録の仕方が「印葉図」だった。「印葉図」とは、植物に墨を塗り、それを紙に押しつけることで形を写す、いわば植物の「拓本」といえよう。嘗百社の会員は、この印葉図の方法をキニホフ Johann Hieronymus Kniphof (1704 - 63) の『植物印葉図譜』*Botanica in originali seu herbarium vivum* (1747) から学んだ。そして嘗百社のほかの会員同様、圭介もこの手法をよく用いており、『錦窠植物図説』の中にもたくさんの「印葉図」が見られる。

「印葉図」は、実用性に富む、植物のすぐれた記録方法だった。この手法を使えば、葉の脈などの特徴を忠実に、しかも簡単に残すことができる。また、ふつうの絵画と違って、短時間に複数の図を作ることもできた。圭介ならびに嘗百社の人々が、西洋の手法を積極的に学び、それを自分たちのものとして上手に取り入れていった姿勢が、この「印葉図」からも窺うことができる。

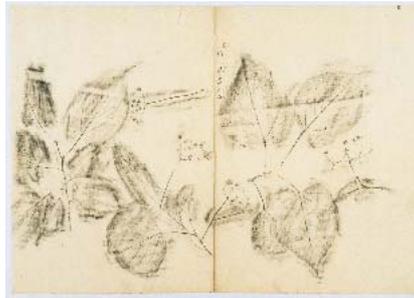


38 チョウジ (第62冊)

フトモモ科フトモモ属の常緑高木。栽培によってできた植物と考えられており、近い野生種はモルッカ諸島からニューギニアに分布する。つぼみを乾燥したものがスパイスとして使われ、「丁字」「クローブ」という名でも知られている。



39 イヌザクラ (第49冊)



40 ボダイジュ (第11冊)



41 アジサイ (第58冊)

『錦窠植物図説』に挿入された印葉図の数々。

6. 圭介の名を冠するヒカゲツツジ

圭介は自分で採集した植物の標本をシーボルトに寄贈し、シーボルトはこれをオランダに持ち帰った。これらの標本から見つかった新種の中には、圭介の名が付けられたものもある(表2)。ヒカゲツツジもその一つで、この植物は圭介の標本をもとにして、ミケル Miquel が新種を発表した。『錦窠植物図説』にも、その学名「*Rhododendron keiskei* Miq.」が誇らしげに記されている。

当時、圭介の名はその標本によって、オランダ周辺の植物学者の間ですでに知られるところとなっていたらしい。また、シーボルトが「余は圭介氏の師であるとともに、また圭介氏は余の師である」と言ったほど、圭介の知識や鑑識眼に対する評判は高かったに違いない。その後、日本を訪れたアーネスト・サトウをはじめとする西洋人も、圭介から頻繁に植物の知識を得ていたことが、『錦窠植物図説』のなかに見えている。

表2．圭介の名を学名にした植物（名古屋大学附属図書館2001）

和名	科名	学名
シモバシラ	シソ科	<i>Keiskea japonica</i> Miq.
ヒカゲツツジ	ツツジ科	<i>Rhododendron keiskei</i> Miq.
イワチドリ	ラン科	<i>Amitostigma keiskei</i> Schltr.
イワナンテン	ツツジ科	<i>Leucothoe keiskei</i> Miq.
オオピランジ	ナデシコ科	<i>Silene keiskei</i> Miq.
スズラン	ユリ科	<i>Convallaria keiskei</i> Miq.
ユキワリイチゲ	キンポウゲ科	<i>Anemone keiskei</i> T.Ito.
セリバシオガマ	ゴマノハグサ科	<i>Pedicularis keiskei</i> Franch et Savat.
イヌヨモギ	キク科	<i>Artemisia keiskeana</i> Miq.
アゼトウナ	キク科	<i>Crepidiastrum keiskeanum</i> Nakai
マルバスマレ	スミレ科	<i>Viola keiskei</i> Miq.



42 イワチドリ



43 スズラン

*42～44，名古屋市東山植物園提供．



44 ヒカゲツツジ ツツジ科ツツジ属の落葉樹で、崖に生え、春に淡い黄色の花を咲かせる。圭介の名にちなみ、*Rhododendron keiskei* と名付けられた。



45 ヒカゲツツジ (第73冊) 圭介の孫、伊藤篤太郎が描いたと思われる図。



46 ヒカゲツツジのタイプ標本 圭介が採集した標本で、この標本をもとにミケル Miquel が新種を記載した。現在は、オランダのライデン国立植物標本室に保管されている (撮影・山口隆男)。

7. 圭介も注目したヒトツバタゴ

ヒトツバタゴはモクセイ科ヒトツバタゴ属の樹木で、日本では東海地方と対馬でしか自然には生えていないという、変わった分布をもつ植物である。多くの冊子を科ごと割り振っている『錦窠植物図説』の中で、圭介はヒトツバタゴを独立した一冊にまとめるという、特別な取り上げ方をしている。

このヒトツバタゴの項には、圭介と平岩親敏の間で交わされた書簡が貼られている。彼らは、「花が多く咲いて

も実がまだだという話があるが、・・・の所ではよく実がなるという。すると雄と雌の木があるのか・・・」といった趣旨の話題を交わしている。実際、ヒトツバタゴは雌雄の花が違う木につく「雌雄異株」の性質をもつ。「雄しべ」「雌しべ」などの訳語をつくった圭介だが、ヒトツバタゴに関する記述からも、植物の繁殖様式に対する高い関心を窺うことができる。



47 ヒトツバタゴ モクセイ科ヒトツバタゴ属の樹木で、日本では愛知県と岐阜県、対馬に分布し、海外では、朝鮮、中国、台湾に見られる。ナンジャモンジャという名前でも知られている（撮影・藤井伸二）。



48 ヒトツバタゴ（第87冊）

（西田佐知子）

電子展示

「伊藤圭介文庫」は圭介の遺稿188冊から成る。その内容は植物を中心に動物、昆虫及びそれに関連する当時の文物を記し、他日の出版に備えたものも多い。圭介の自筆原稿や多彩なスケッチのほか、入手した各種資料、断片、手紙等の「現物」がそのまま貼り込まれていることが大きな特徴である。そこには、既に失われてしまった書物の断簡なども多数含まれており、当時の文化世界が凝縮した形で、独特の価値をもつ貴重な資料群を形成している。

しかし、圭介の筆跡に相当癖があり、難解であることはおくとしても、洋の東西、時代を問わず博搜された資料世界は、容易なことでは認識しがたい存在である。こうした資料そのものの扱いの難しさから、これまで数多くの研究資料で「伊藤圭介文庫」の重要性が指摘されることはあっても、その原典の全容についての包括的な調査研究は未着手であり、また正確な内容把握はなされてこなかったのが実情であった。

この電子展示では、この「伊藤圭介文庫」の内容分析を行い、デジタル化とメタデータの付与、人物関係図の組織化を施し、電子図書館技術をもって圭介の意識した豊潤な学術世界を探求するものである。

検索には、伊藤圭介に関わる人物、植物・魚・動物・虫に関する多様な項目を用意した。名古屋大学附属図書館のホームページ (<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>) からご利用ください。 (逸村 裕)



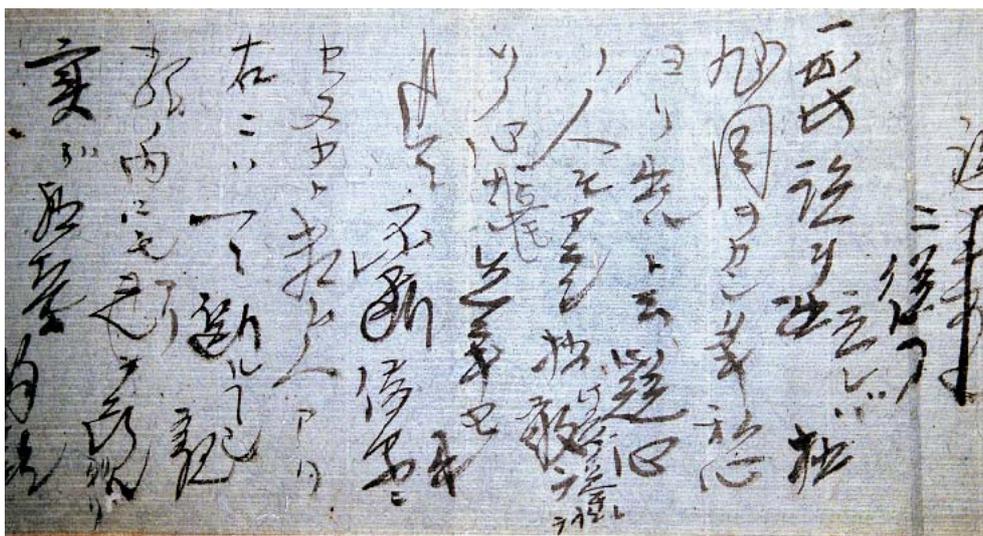
手紙に見る圭介の素顔

一通の圭介の手紙がある（東山植物園所蔵）。訂正書入れの跡が夥しい下書きで、自家の手控えだけに、例の後人泣かせの筆蹟を一層難読なものとしている。3月9日、「種痘懸諸君」宛て。内容より圭介68歳の1870年（明治3）頃と推定出来る（引用は適宜表記を改めた）。

それまであった広小路種痘所（1852年〔嘉永5〕「広小路大津町角ヨリ西工六軒目閑所」に設置）を改め、新種痘所を設ける計画に関するものである。主意は「先ヅ粗忽二大金ノ家ヲ買ハシヨリハ、先ヅ当分相応ノ借家ヲ借り、種痘所二病院ノマネヲ兼ネ、一統相和シ相行ヒ試テ、先様子ヲナガメル」よう勧めること。その理由は、もしも「只今リツバニ大金ノ家ヲ買ヒ、思ハシク行カズ、ソノ内ニ追テ内輪不和、入組等ヲ発シ、各自ノ心離散ニテ、第一全テ水泡、大金出来、会計方大難渋ニナリテ八大迷惑、大不外聞也」というもので、圭介の細心周到な性格をうかがわせる。

そして、そのための適当の借家が見当たらない場合には、「旭園」を貸してもよいと提案している。旭園とは朝日町（現・中区錦3丁目、亀末広前）にあった圭介の別宅である。それにつき、心配の種があった。「此クノ如キ説ヲ立ツレバ、拙、旭園ヲカシタキ私心ヨリ出ツルト云フ疑心ノ人モアラン。拙、敢テ此度ノ拳ニ於テ、ソノ心一点モナシ。先年已来追々不断借家ニセヌカト頼ム人アリ。右ニハ一々断ルコト也。親類ノ内ニモアリ。断リタリ。実ハ拙宅、拙、夕陽西山ニ暮ク、此处ヲ逍遥シテ餘齡ヲ養ハントス。先今日迄ノ気分ハ此クノ如ク也。明日ノ処ハ知ラザル也。付テハ若シ私心ヨリ前説ノ如クト云フ論ヲ蔭ニテ云フ人アリテハ愉快ナラズ。旭園ノ論ハ更ニ御断リ申也。実ハ惜シキ也」という。外より借家に望む人が多いのに、自らの隠居所とすべく申し出を断っていることをわざわざ述べ、私利私欲のために旭園を貸したいわけではないと強調しているのである。

世の中には結果さえ良ければ、その間の人の思わくは二の次であるという人もいる。が、この懇切な申し開きは、圭介がそのようなタイプではなかったことを物語っている。また、その背景に陰口をたたかれるような経験があったことも想像される。いつの世も共同事業というのは難しいもので、圭介にも相応の苦勞のあったことがしのばれる。 （塩村 耕）



（名古屋市東山植物園所蔵）

描かれた動物 - 獣・虫・魚 -

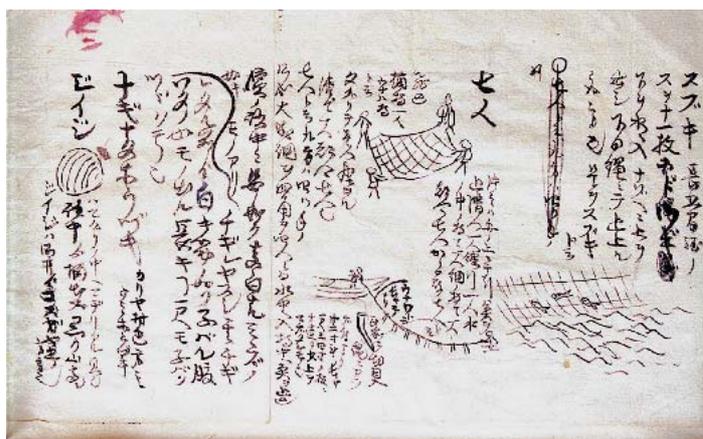
嘗百社に代表される尾張本草学の特徴は、きわだった実証性と共同研究を重んじる学風にあったとされるが、それは、終生変わらぬ圭介自身の研究姿勢でもあった。その飽くなき探求心は、植物にとどまらず、考古遺物や鉱物、動物など、自然界のあらゆる対象へと開かれていたのである。まさに「蒐集の鬼」とでも形容するほかないその仕事ぶりは、圭介旧蔵コレクションである伊藤圭介文庫の各資料にも窺うことができる。ここでは、主に動物分野に関わる図譜をとりあげ、圭介による資料蒐集の様子などについても触れることにしたい。

1. 採草叢書

圭介は自身の履歴について、「父兄并ニ植物学家水谷助六ニ從ヒ植物学ヲ修ム、已後年々、尾、勢、志、濃、信、諸州ノ山野ヲ遍歴シ、実験ノ為メ植物ノ探索採集ニ勉勵ス、文政三年（ 齡十八 [1820] ）医学并ニ植物学ヲ卒業ス、又尾州知多郡海浜ヨリ篠島、日間賀島ニ涉リ動植鉱諸物ヲ採集シ、更ニ參州猿投山ニ及ブ」（「東京学士会院會員理学博士伊藤圭介ノ伝」1890年[明治23]）と述べている。伊藤圭介文庫には、その師水谷豊文が、木曾（1810年[文化7]）及び知多半島（1801年[享和元]・1809年[文化6]）に採集旅行に出た際の自筆記録が残されている（圭介により、木曾紀行と知多紀行の二分冊にされ、「採草叢書」の仮題が付されている）。圭介はその表紙に「錦窠百珍之一」と記して愛蔵するとともに、扉には「若シ他日之ヲ抜粹、訂正、精撰スルヲ得バ、初学ノ為メ裨益尠シトセズ、更ニ再訂シ、活版印刷ノ勞ヲトル後賢アラバ、余地下ノ喜知ルベシ」とも述べている。前述した通り、本書は水谷豊文の自筆草稿という性格から、調査の全貌を詳述するものではないが、圭介もしばしば同道したとされる、当時のフィールドワークの様子を伝える貴重な資料となっている。



49 採草叢書正編の扉



50 採草叢書続編

知多半島の調査では、物産以外にも、周辺地誌や、各種漁法なども詳しく記録し、自然と人間をトータルにみつめようとしている。

2 . 錦窠動物図説

この一冊は、アメフラシのモノグラフである。アメフラシに関する多数の書物・図譜を調査、あるいは転写し、さらに実物の観察・写生も行っている。他の稿本類もほぼ同様であるが、こうした手法は、現代科学のレベルではほとんど問題にされないかもしれないが、徹底的な資料集積により構築された稿本類は、19世紀当時の文化情報資源として、かけがいのない文化遺産であり続けるであろう。



51 アメフラシ 某書からの転写図であるが、千虫譜の図と同一であるため、元図はどれかと言及している。当時は、図譜の刊本が稀少であり、情報の入手も困難であったため、こうした転写が頻繁に行われていた。

3 . 錦窠獣譜

扉には、「獸類図彙全、撰者不詳、獸類諸図ノ雜纂ニシテ此図亦精細ナラズト雖トモ亦參觀ニ供スベシ」とあり、比較的軽い扱いの資料だったことがわかる（他に「可疑」と書き込まれた資料も散見され、厳しい吟味のあとが窺える）。内容は、外国産を中心とする47種の動物図及び山梨産鉱物図1種。撰者不詳とされているが、「麻兒丁獸」図の説明には、「文政辛巳（4年/1821）丹州先生黒背ノ図説ヲ作テ示サル、実ニソノ精密ヲ極ムト云ベシ・・・己丑（文政12年/1829）夏五月桂々嶼識」と記されていることから、幕府奥医師栗本丹州と親しく、蘭人とも交流をもった桂川家六代・国寧（くにやす）が撰者と思われる。国寧が外国の図譜等から転写して作った図譜（あるいはその写本）をもとに、それを再転写し、編集したものであろう。なお、「九十五翁錦窠」「我齡九十又五」の朱印が捺されていることから、1897年（明治30）頃に整理されたものと考えられる。



52 ラッコ 特有のポーズで描かれている。



53 カッパ 実在するものと考えられていた。



54 ラクダ
「文政四（1821年）辛巳七月朔日阿蘭陀船持渡」とある。

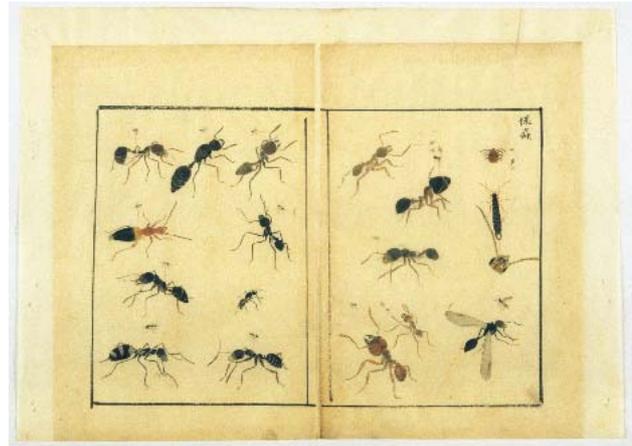
4 . 錦窠虫譜

虫類の情報を集積したものが「錦窠虫譜」(全11巻、巻4欠)である。蝉のモノグラフである5巻(蝉譜)を除き、6巻までは、イロ八順に個別の虫(当時の分類で、爬虫類、両生類などを含む)を整理し、それぞれについて観察を加え、文献資料を博搜するとともに、屋漏堂虫譜や千虫譜、雀巢庵虫譜、梅園図譜など、当代一流の虫譜から図を転写し、あるいは雀巢庵自筆の資料も貼り込み、虫を同定できるような構成になっている。

続く8~11巻は、本邦初の体系的虫譜として知られる幕臣飯室庄左衛門「虫譜図説」全12巻(1856年[安政3]自序)の写本(1879年[明治12]写)である。しかしその11巻は、依頼した画工のミスであろうか、図の一部しかない不完全な抄写本であった。それに気づいた圭介は、「十一之巻、仙之助よりかり写」と注記したうえで、自身が模写を試みている。巻11の一部を転写した画工の図と比べ、圭介による鉛筆画の出来はいかがであろうか。博物の鑑定には抜群の眼力を有し、また山本梅逸に学び書画もよくした圭介だったが、博物写生はまた別物であったようである。こうしてみると、圭介の稿本の多くは、大量の転写図を編集した形をとっていることにあらためて気づかされる。この点は、これまで看過されがちであったが、コレクションの性格を知るうえで重要な点となる。しかし、それが稿本類の資料的価値を減じさせるものでは断じてない。写真やコピーのなかった時代、転写の広がり、博物情報の流通・普及に大きな功績があったのであり(磯野1995)、さらにこうして、後世の我々にも活用の機会を与えてくれているのであるから。



55 ハッチョウトンボ(第6冊)
世界最小のトンボ。その名は名古屋矢田八丁に由来するか。



56 アリ(第7冊)
吉田雀巢庵の自筆画(顕微鏡使用)



57 コアシナガバチ(第8冊)



58 画工の転写図と圭介の模写(第10冊)

5 . 錦窠魚譜

「錦窠魚譜」は、全部で36冊からなり、17冊は国会図書館所蔵、残り19冊が当館の所蔵となっている。体系的なものではないが、8～10冊の奥倉辰行編「水族写真(鯛譜)」の美しい写本や13～19冊の畔田伴存「熊野産物初志・魚譜」の写本を含むなど、良質な資料の蒐集に努めていたことがわかる。また、6・7冊には、圭介が後継者として期待しながらも29歳の若さで夭折した三男伊藤謙の遺稿「動物学魚篇」が含まれている。このほか、5冊には鯨のモノグラフを配し、12冊には栗本丹州の書入がある写本「南勢魚譜」(1835年[天保6]写)が収められている。これらのなかから、珍品として注目されたマンボウ、鯨類など数品を例示する。(秋山晶則)



59 人魚(第3冊)



60 マンボウ(第4冊)



61 ゴンドウクジラ(第5冊)
1804年(文化元)広小路で見世物に出されていたとある。



62 ネコギギ(第1冊)
治田村(現三重県員弁郡北勢町)・名未詳とある。
1957年に発見されたナマズ目ギギ科の日本固有種(1977年に天然記念物指定)。愛知・三重の伊勢湾流入河川に生息するが、その数は激減している。

伊藤圭介と名古屋大学

伊藤圭介は、単に本草学を学問として深めただけではなく、本図録・にみるように、この地域における本草学の普及にも貢献していた。しかし実は、江戸時代だけではなく明治以降も、この地域の医学や本草学・博物学の発展に彼の影響力があり、また圭介没後は、逆に地域教育のために圭介の顕彰運動が行われている。そしてその両方に名古屋大学が深く関係している。そこで、明治以降の圭介とこの地域との関わりを、名古屋大学との関係を軸にここでは紹介したい。

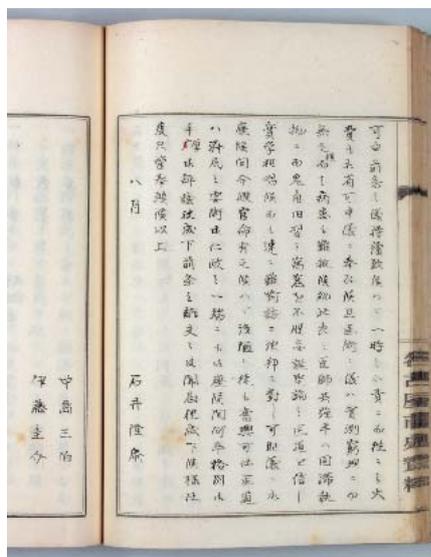
1. 医学校設置への努力

幕末の尾張は、圭介らの努力により、本草学で先駆的な業績をあげ、種痘所の設置でも全国的普及に遅れをとることはなかった。しかし蘭方医学＝すなわち西洋医学は全体として漢方にくらべあまり普及してはいなかった。

明治初年、圭介を中心とする種痘医グループ(主として嘗百社グループ、後述)が、種痘所の改革をめざして、その構想および金策について協議している。その記録の中に「訳書等ニテ講釈日並相立候事、原書等教授方も夫々相定度候事」という記述がある。すなわち西欧医学翻訳書による講読や、原書による授業があげられており、西洋医学によって立つ医学校構想が、尾張ではじめて、圭介を中心とするグループによって示されたと考えることができる。

1870年(明治3)8月になると、石井隆莪・中島三伯・伊藤圭介の3名による建議書が名古屋藩庁宛てに提出される。これは医学所・治療所・(薬)調合所・製薬所からなる、医療総合機関の設置を建議したものと考えられている。同年閏10月には、名古屋藩によって石井と圭介が種痘所頭取・病院開業係に任命され、先の建議書に対応して、名古屋藩における病院等の設置が、いよいよ本格的に動きだしたと思われる。ただ圭介は明治政府から大学に出仕するように命じられ、11月に名古屋を離れて上京してしまったため、その後の医学校設立に間接的にはアドバイスをしていたが、直接的には関与しなくなったようである。

しかし圭介らの努力は結果として実を結び、翌年8月には名古屋城正面前南にあった評定所・町奉行所跡に仮病院・仮医学校が設置された。この2施設こそが、現在の名古屋大学医学部の源流となるもので、圭介らが名古屋大学の基を築いたともいえよう。



63 1870年(明治3)8月、圭介ら3名によって提出された西洋医学研究所設置の建議書(部分)。『種痘所用留』1912年(大正元)の写(名古屋市鶴舞中央図書館所蔵)

2. 愛知教育博物館(会)と尾張本草学・伊藤圭介

仮医学校は、のち愛知医学校と改称され、この地域の医学教育の中心となっていく。この愛知医学校へ1881年(明治14)に教諭として赴任した奈良坂源一郎は、専門は解剖学であったが多芸多才で、短歌・絵画・琴・尺八などを嗜むほかに、博物学にも興味をもっていた。彼は1886年(明治19)頃から同志とともに、各自所蔵の博物標品を持ち寄り陳列しながら、互いに啓蒙しつつ学術的考究につとめるようになっていた。翌年には浪越(名古屋)博物会を結成、奈良坂自身が会長に就任し、同年2月には第一回教育博物会という展示会を開催している。

博物会は雑誌を発行、さらに1891年(明治24)、愛知教育博物館を大須七つ寺の西に建て、動物・植物・鉱物の収集展示を恒常的に行うまでになっていた。そして1892年(明治25)7月5・6日には、圭介の卒寿を記念して、圭介本人を名古屋に招いて「理学博士伊藤圭介翁九十賀寿博物会」がこの愛知教育博物館で行われた。この催しには、圭介本人ほか、教育博物会や嘗百交友社などが展示品を出品するなどして、協力をしている。

ところでこの嘗百交友社は、圭介もその活動の中心的役割をはたしていた、嘗百社の流れを汲んでいる会である。江戸時代も19世紀に入ると尾張でも本草学研究の集まりが盛んに催されるようになったが、嘗百社もそのひとつであった。ただ明治に入り、圭介らが東京へ移って以降になると、その活動もあまり盛んではなくなったようである。しかし嘗百社自体は他の本草会と合併し、嘗百交友社と名をかえて存続していた。

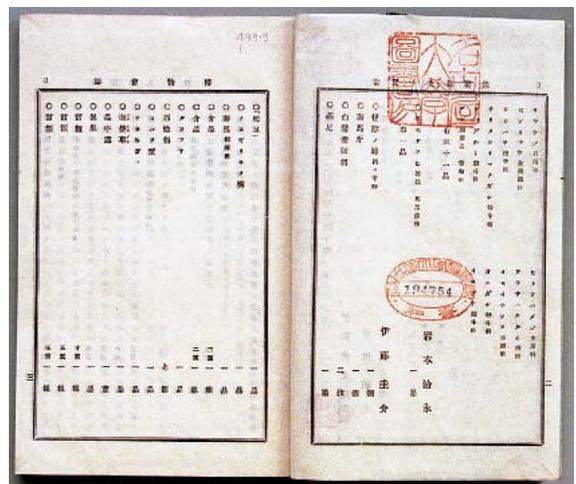
すなわち圭介の流れを汲むこの嘗百交友社や圭介自身が、初期の愛知教育博物館(会)の活動に深く関わり、協力をしていたということになる。奈良坂が主催した愛知教育博物館(会)は、圭介がこの地に根付かせた尾張本草学・博物学という土壌の上に、かつ圭介自身の力もかりて、その運営を軌道にのせることができたといえるのではないか。なお、この4年前に圭介は理学博士の称号をうけ、また2年前には東京上野で米寿賀会が行われ、各種の記念刊行物も出版されている。また、1915年(大正4)5月頃には、大礼贈位の検討も行われたが、これは実現しなかった。



64 九十賀の際の記念写真 1892年(明治25)(名古屋市東山植物園所蔵)
最前列左から5人目が圭介、中列右から6人目が奈良坂源一郎。



65 『錦窠翁九十賀壽博物会誌』1892年(明治25)刊行(名古屋大学生命農学図書館・石井文庫所蔵)圭介自身も出品している。



3. 勝沼精蔵による伊藤圭介の顕彰活動

勝沼精蔵は1919年（大正8）先の愛知医学校の後身である愛知県立医学専門学校に赴任した。名古屋に赴くとき「名古屋における偉大な人物は文においては伊藤圭介、武においては豊臣秀吉だ」と先輩から聞かされ、また日本医学史会会員でもあった勝沼は、戦前から圭介に強い関心をもっていたようである。勝沼は次のように述べている。

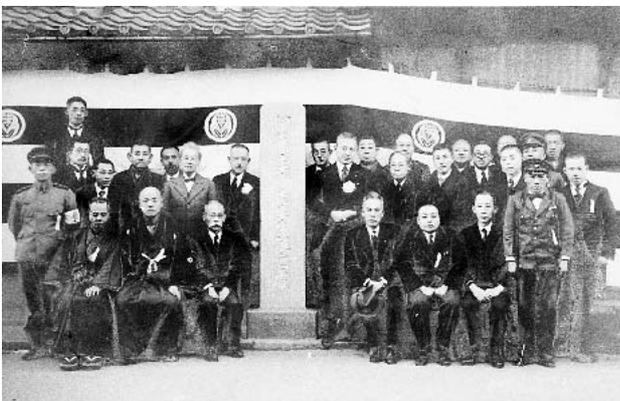
当地でも、小学校などの教育において、郷土の偉材の事蹟を、郷土の地理・歴史に繰入れて、指導目標として役立たせることが望ましい。スコットランドにジェームス・ワットの銅像があり、スティーヴンソンの最初つくった機関車があり、巴里にパスツールの銅像があったりなどして、その前に先生と生徒、あるいは親と子が並んで、彼らの業績を追慕していた姿は、今なお私の忘れがたいところである。日本でも、名古屋でも、このような情景が願わしいと思うのは、決して私一人にはとどまらぬであろう。（勝沼精蔵『桂堂夜話』1955年、145～146頁）

ところで勝沼のこの考え方は、すでに1937年（昭和12）頃から表明されていた。このころ勝沼は、名古屋市・愛知県・商工会議所などの地元関係者を名古屋市公会堂に集めて、圭介の銅像を建設したいと提唱している。しかも地元の生徒に「自分たちが建てた」という気持ちを育てたいので、生徒たちにその費用を負担させたいとも付け加えている。

ただ時局が戦時へ進んでいたこともあってか、この時は銅像建設までには至らなかった。しかしこの席上で地元の医学史研究者である吉川芳秋から提案された「伊藤圭介遺墨遺品展覧会」が、同年3月20日から25日に市立名古屋図書館（現名古屋市鶴舞中央図書館）で開催されている。翌1938年（昭和13）8月には「伊藤圭介先生遺蹟顕彰会」が設立され、勝沼が会長に就いている。この会は翌1939年（昭和14）1月22日に圭介の菩提寺である光勝院で追善法要を行い、ついで圭介の生誕日である1月27日には、圭介の生家跡地である名古屋市東区呉服町4丁目2番地に建てた「伊藤圭介先生生誕之處」という碑の除幕式を行っている。あわせて圭介の生家跡地近くの大成尋常高等小学校（現名古屋市立名城小学校）で記念講演会や展覧会も当日開かれている。これらの式や会



66 「伊藤圭介先生生誕之處」碑の拓本 1939年（昭和14）年（名古屋市東山植物園所蔵）高野長英らが訪れたとある。



67 伊藤圭介先生生誕遺蹟碑建設記念写真 1939年（昭和14）年（名古屋市東山植物園所蔵）後列、碑をはさんで左へ2人目が牧野富太郎、右2人目が勝沼精蔵。



68 1936～1939年（昭和11～14）にかけて刊行された伊藤圭介関係の本（名古屋市東山植物園所蔵）

戦後1949年(昭和24)から1959年(昭和34)まで10年におよぶ長きにわたって、勝沼は第3代名古屋大学総長を務めたが、この間圭介のさらなる評価や顕彰に再び努力を費やす。まず1955年(昭和30)に伊藤圭介の関係資料が、ご遺族の伊藤一郎氏から名古屋大学附属図書館へ譲渡されている。この資料は数度の空襲からご遺族が守り続けてきたものであるが、勝沼が強く希望したため、ご遺族がこれに同意されて譲渡が実現した。今回の展示会には、この時に寄贈された資料が数多く出展されている。なおこの資料に関しては、翌1956年(昭和31)に『伊藤文庫図書目録』が、名古屋大学附属図書館から刊行されている。

おそらくこれがきっかけとなったのであろう。同年6月に今度は「伊藤圭介先生顕彰会」という名称で再度顕彰会が設立され、その会長に勝沼が就任している。この会においては、地元の名城小学校校長村瀬内匠氏ほか、この地域の学校教員の協力が大きく、愛知県下の小中高校大学の学生生徒約50万人から募金200万円余集め、翌1957年(昭和32)5月5日に鶴舞図書館前に圭介の座像を建てている。また1961年(昭和36)3月15日に前述の名城小学校と御園小学校(名城小学校分校から同年4月に独立)に同一型の圭介の胸像が建てられている。どちらにも「こどもたちが5年間おこずかいを節約して建てた」と記されていることから、会が設立された1956年(昭和31)頃から募金が行われ、建設が実現されたことになる。勝沼が戦前から考えていた生徒の募金による圭介の胸像建設が、地元教員の協力を得て、まさにやっここに実現したといえよう。

このほか圭介の生家跡地にある「伊藤圭介先生誕生之地」の碑も、この会によって1958年(昭和33)1月17日に再建されている(1939年に建てた碑は空襲で廃毀)。また吉川芳秋著『伊藤圭介翁：日本最初の理学博士尾張医科学文化の恩人』も1957年(昭和32)にこの会から刊行されている。このように勝沼はこの時期、名古屋大学総長の地位と伊藤圭介顕彰会をフル活用して、戦前以上に圭介の顕彰に奔走した。なお1957年(昭和32)春には東山植物園内にも名古屋市助役田淵寿郎氏の寄進によって胸像が建てられており、吹上小学校にも校医であった岩塚審氏の寄贈により胸像が建てられ、1965年(昭和40)3月17日に除幕式が行われている。

以上のように名古屋大学は、圭介と歴史的に深く関わりながら現在に至っている。ある意味、このような関係の深さにより、名古屋大学に圭介の資料が現在残されるようになったともいえようか。

(神谷 智)

博覧会と伊藤圭介

1872年（明治5）3月、文部省博物局が主催する、わが国初の博覧会が開催された。写真はこの博覧会の会場となった東京・湯島聖堂の大成殿前で撮影された、関係者による記念写真の一枚である。伊藤圭介が今回の博覧会において果たした役割は具体的ではないが、この写真は圭介もその開催に際して中心メンバーの一人として活躍していたことを示してくれている。



前列右端から服部雪斎、田中芳男、内田正雄、伊藤圭介、町田久成、蜷川式胤、田中房種
（東京国立博物館所蔵）

圭介は維新後、1870年12月に大学への出仕を命ぜられ、翌年7月に大学が廃止されて文部省が設置されると、引き続き文部省出仕を仰せ付けられた。文部省では文部少教授・編輯寮権助をへて1872年4月に七等出仕博物専務となっている。大学の所轄である大学南校（旧開成所）の物産局は、伊藤圭介が出仕した後の1871年5月に物産会を開催した。この物産会は物産局に勤務していた田中芳男が中心となって企画したものであり、おそらく圭介の大学出仕は物産会開催にあわせ

たものであろう。彼は田中とともに、官が主催の物産会において、多数の出品物を個人で提供している。たとえば鉱物部門では、化石之部26点、土石之部257点、鉱石之部71点もの出品があり、総数の4割以上を占める。また植物部門においてもその大半が伊藤・田中の出品物であった。

ところで、はじめ大学南校物産局は博物館の名で博覧会を開く構想であったが、実際には名称は物産会と変更され、期間も縮小された。その理由は明らかではないが、このときの構想が1872年の文部省博覧会へと発展したのである。そして圭介は、この文部省博覧会においても、古瓦・勾玉管石金環類などの計11件を出品していた。

文部省博覧会において特に話題となったのは、写真にもみえる名古屋城の金鯨である。江戸時代を通じて全国で唯一残った金鯨も、維新後は「無用ノ長物」とされ、「金ヲ剥シ乍聊御用途ノ末ニ貢納仕度」との名古屋藩の願い出により1871年6月に宮内省に献納されていた（よって金鯨は「御物」の一つとしての出品である）。今日、文部省博覧会を題材にした当時の錦絵をいくつか見ることができるが、その多くは金鯨をメインに描かれており、人々の視線が金鯨に集まっていたことを物語っている。金鯨は一尾（雌）が1873年のウィーン万国博覧会に、もう一尾（雄）が国内で開かれた勸業博覧会にも出品され、各地で人気を博した。その後、伊藤次郎左衛門（松坂屋）をはじめとする名古屋の有志の歎願により、1879年2月に宮内省から名古屋城天守閣大棟に戻ることになる。

この金鯨の人気もあって文部省博覧会の総観覧者数は20万人近くにのぼり、予定の期間を大幅に延長して4月晦日に終了した。
（石川 寛）

錦窠伊藤圭介翁が後世に残した最大の遺産は、『植物図説雑纂』と『錦窠植物図説』の2大資料集をはじめとする一連の資料集であろう。翁は幕末頃から没する直前まで動植物にわたる資料を積極的に収集し、それはいま20点ほどの資料集として国立国会図書館、名古屋大学附属図書館、名古屋市東山植物園の3者に所蔵されている。そのどれを取っても、翁自身をはじめとする多数の博物家・画家の自筆資料、すでに失われた著作あるいは稀本の実物や写し、一枚刷、書簡、広告等々を含む宝の山だが、残念ながら十分に調べられているとは言いがたい。

そのうち国会図書館には、孫で後継者の伊藤篤太郎が引き継いだ資料集が残り、表に示したように主なものだけで11点を数える。幸い私は数年のあいだに一通り目を通すことができたので、この機会にそれぞれの概要を紹介しておきたい。

表 国立国会図書館にある伊藤圭介・篤太郎旧蔵資料集

書名	請求番号	冊数	備考
植物図説雑纂*	別6 - 9	254	草類、イロ八順：原本122冊を分冊
植物図説雑纂	別11 - 33	17	木類・草類・印葉図集など、雑多な未整理資料
錦窠植物図説	別11 - 13	11	木類の科別・牡丹譜：冊11はイネ科のアシ
錦窠禾本譜**	別11 - 8	25	イロ八順：イネ科ほか、曲直瀬正貞『芒類写真』
錦窠菌譜**	別11 - 9	13	イロ八順：キノコ類
錦窠羊歯譜**	別11 - 12	13	イロ八順：シダ類
錦窠竹譜**	別11 - 14	8	イロ八順
錦窠蘭譜**	別11 - 17	4	イロ八順：冊4は『小石川植物園蘭譜』
錦窠蟹譜**	別11 - 7	5	イロ八順：正編2冊・続編3冊
錦窠禽譜**	別11 - 10	23	イロ八順、正編6冊・続編17冊：原本20冊を分冊
錦窠魚譜**	別11 - 11	32	イロ八順、鮫譜・鮭譜などを含む：原本17冊を分冊

* 本資料は伊藤篤太郎の没後、京子夫人から寄贈された。それ以外は購入資料である。

** 孫伊藤篤太郎が圭介の遺稿を整理・編集したので、「伊藤圭介・伊藤篤太郎編」とするのが妥当な資料。

*

*

*

『植物図説雑纂』別6 - 9本(254冊)：原本は130冊だったが、篤太郎が冊110を冊51に合冊したので、129冊となった。そのうち6冊が行方不明、冊113は東山植物園が所蔵している(いま4冊に分冊)。それ以外の原本122冊が国会図書館に存在するが、原本は厚すぎるので、現在は分冊化して254冊となっている⁽¹⁾。

本書は日本産および渡来した草類に関する資料を品名のイロ八順に配列しており、この方式は以下の資料集にも共通している⁽²⁾。所収資料は、和漢の本草書・博物書・写生図・印葉図・一枚刷・新聞・広告・書簡など多岐にわたるが、軸は圭介の師水谷豊文が編纂した『本草綱目記聞』と思われる。ついで数多いのは、友人大窪昌章の印葉図、幕臣飯室庄左衛門の自筆本『草花図譜』、著者不明の『花名集』など。数は限られるが、博物画家服部雪斎の自筆画も目につく。また、以下は、新出と思われる資料の一端である。

伊藤圭介著「人参培養説」：1827年(文政10)に日光で採葉した折に記した短文。

前田利保著『万香園裡花壇綱目』の「巴戟天～升麻」部：同書での欠落部に相当。

坂本浩然自筆本『福寿草図譜』：小石川植物園園丁内山富次郎の注記を追加。

水谷豊文自筆本『桜艸花形附』：サクラソウ124品の墨画、花銘・形状の注付。

馬場大助画・加藤竹斎写『資生圃百合図』：園芸家クラマー所蔵の原本を転写。

一枚刷：「尾陽あさがほ名寄鏡」「石斛蘭七五三」「蒲公英競」など、多数。

『植物図説雑纂』別11 - 33本(17冊)：前項の『植物図説雑纂』別6 - 9本と次項の『錦窠植物図説』に収めるべき資料が、未整理のまま綴じ込まれている。未刊に終わった圭介著『日本植物図説：草部イ・二編』の試し刷・版下、服部雪斎のサボテン図9点などが含まれる。

『錦窠植物図説』(11冊)：木類の資料集で、原本全164冊の大半は名大に所蔵されている。国会本は全11冊で、冊番号1～10が原本の巻1～8、10、112の計10冊に相当。冊番号11の内容はイネ科のアシ類で、本来は『錦窠禾本譜』に含めるのが妥当な資料だが、「錦窠植物図説」と題箋にあるので図書館側が本資料に加えてしまったらしい。

冊1・2は「牡丹譜」で、牡丹の販売目録「賞花集」3点(1738年[元文3]ほか)などの重要資料を含む。冊3以降は科別で、冊3臘梅科、冊4～7木蘭科、冊8伏牛花科、冊9椅科(原本冊10)、冊10樟科(原本冊112)。園芸品の渡来に関するメモが参考になる。

『錦窠禾本譜』(25冊)：冊1～18がイネ科(イロ八順)、19がイネ科未定品、20～23がカヤツリグサ科。水戸の木内政章著『常陸物産誌』の引用と水谷豊文の図が目立つ。冊24～25は、幕医曲直瀬正貞自筆本『芒類写真』に当てられている。

『錦窠菌譜』(13冊)：冊1が総説、2～10がイロ八順の資料集、11～12が未詳品、13がキノコ栽培に関する資料。吉田平九郎著『雀巢菌譜』、市岡智寛著『信陽菌譜』、ついて水谷豊文の図が多い。また、総説中の書目リストには井岡桜仙、松井丹右衛門、西村広休、丹波修治などの著作も挙げられている。

『錦窠羊歯譜』(13冊)：冊1が総説的資料で、友人松井丹右衛門(朝寝斎)の『羊歯集考』が所収されている。冊2～12がイロ八順資料集で、飯室庄左衛門自筆『草花図譜』からの図および説の切抜きも多い。冊13が未詳品で、小笠原諸島産シダ類がかなり含まれる。

『錦窠竹譜』(8冊)：冊1が総説で、武蔵石寿の資料や、木内政章著『常陸物産誌』などを載せる。冊2～7がイロ八順資料集、冊8は雑部。冊7の孟宗竹の項では尾張への伝播経路も記されている。また竹の開花・結実の項に、万香亭前田利保の「竹米」の文と、それと対になるらしい吉田正恭の「竹実考」を所収。

『錦窠蘭譜』(4冊)：冊1は総説、2～3がイロ八順資料集で、産地や渡来年を記す例が少なからずあり、参考になる。冊4は『小石川植物園蘭譜』東大小石川植物園の蘭を同園の画家加藤竹斎が描いた図譜で、それを時田喜忠が転写した。ただし、原本は61点らしいが転写図は24点だけで、注記は収録されていない。

『錦窠蟹譜』(5冊)：冊1～2が正編、3～5が続編。冊1は田中芳男が整理したイロ八順の資料で、吉田平九郎著『介譜』から30図を転写している。冊2は「椎氏蟹譜鈔」で、シーボルトの『日本動物誌・甲殻類編』からの圭介自身による学名・和名対照リストと図26点の略写である。冊3以降は篤太郎の編集で、3～4は総説およびイロ八順の各論、冊5は水谷豊文の自筆図19点を篤太郎がまとめた「豊文蟹譜」と、圭介抄録の「蟹之絵巻物」。後者は、引用文の内容から栗本丹洲編『蟹譜』と思われる。

『錦窠禽譜』(23冊)：冊1～6が正編(原本3冊を分冊)、冊7～23が続編で、ともに品名のイロ八順資料集。正編は1872年(明治5)に田中芳男が整理し、続編は篤太郎編と思われる。充実した内容で、圭介が動物にも関心が深かったことを示す。第一の特徴は尾張やその近辺の人々が描いた図が多いこと。尾張の画家沼田朴斎、その孫らしい沼田荷舟、画家清水淇川、師の水谷豊文、友人の吉田雀巢庵、大垣藩医江馬活堂の自筆図が少なくない。特徴の第二は熊本侯細川重賢の『遊禽図』(高松侯松平頼恭編禽類図譜の転写)に由来する水鳥図が数組存在すること。『遊禽図』は内藤東圃著・赤林信定編『張州雑誌』にも多数転写されており、どのようにして尾張に伝わり、その地で拓まったのか、興味深い。

第三は御用伺絵。珍禽渡来の際に長崎から幕府に送って御用の有無を問い合わせた絵。も数多く転写されていること。第四は『屋漏堂禽譜』の図と文が約70点も写されていること。同書は加賀藩家老村井長世(屋漏堂)が編集したと思われる図譜だが、稀本であり、とくに図は初見。第五は、圭介自身の編集によるモノグラフ

「鵜嶋説」「杜鵑図纂」「蓑衣鶴図説」「雷鳥図彙」「仏法僧説」「都鳥説」の資料が含まれていること。

『錦窠魚譜』(32冊): 原本17冊を分冊化して32冊とした。冊1~24がイロ八順資料集であり、冊25~26「鮫譜」、冊27「鮭譜」、冊28「鱒魚譜」、冊29「比目魚譜」、冊30「鮫譜」、冊31「摂州尼崎海錯簿」(享保元文産物帳の一つ『尼崎図上』の転写か)、冊32は「コ」部の追加となっている。

全編を通じて栗本丹洲(4代瑞見、瑞仙院)の魚譜からの転写図が多く、『瑞仙筑前魚図』のようにいま存否不明の図譜も使われている。また、冊29所収の篤太郎注に、「家蔵栗本氏魚譜凡二十卷アリ。此魚譜八栗本鋤雲翁[6代瑞見]ヨリ借用シテ影写セルモノナリ」とあるが、『栗本魚譜』原本は分散したと思われるので、原姿を伝える貴重な証言である。また、大槻玄沢編『蘭畹摘芳』筆録本(東京国立博物館に現存)所収の丹洲および玄沢の小文も幾つか転写されている⁽³⁾。

そのほか、堀田龍之助(畔田翠山の弟子)、友人の大窪昌章や吉田雀巢庵の自筆魚図、珍しい一枚刷「金魚名類考」(1796年[寛政8]刊)なども残る。また、冊30「鮫譜」は圭介の子息で若くして没した謙の遺稿。謙は日本産魚類の図譜編纂を志して、博物画家木村静山に生魚や標本の写生を頼み、この遺稿にもそれが使われている。また、それ以外の静山の魚図は、『魚類写生図』135枚(別11-53)として国会図書館に所蔵されている。

* * *

限られた紙数で詳細な点には筆が及ばなかったが、大要は記したつもりである。国会図書館蔵の上記全資料は貴重書に指定されているが、すべてマイクロフィルム化されており、これはいつでも閲覧可能である。この資料の宝庫はさまざまな角度から利用できると思うので、新たに探索を進める方が現われるのを期待してやまない。

注

- (1) 『植物図説雑纂』別6-9本については国会図書館発行の『参考書誌研究』に近々報告するので、詳細はそれに譲る。
- (2) 『植物図説雑纂』各冊の所蔵品名については、河村典久、伊藤圭介編『植物図説雑纂』目録、『伊藤圭介日記』、8集、名古屋市東山植物園、2001年。
- (3) 磯野直秀、『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図、『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』、15号、1994年。磯野直秀、筆録本『蘭畹摘芳』、同前、17号、1995年。

特論 2

日本初の理学博士伊藤圭介の誕生

土井康弘

はじめに

伊藤圭介という人物を端的に語ろうとすると、二つの「日本初」から説明するのが適当と思われる。すなわち第一に、尾張で町医として独立したのち、1827年（文政10）から翌年にかけて長崎出島オランダ商館長付医師シーボルトに師事し、1829年、日本で初めてリンネの植物分類法を紹介した『泰西本草名疏』を出版したこと。第二に、同人が尾張藩医を経て、1870年（明治3）に大学（のちの文部省）に出仕して以降、1886年に東京大学を非職となるまで、一貫して植物を中心とする自然物の研究を行ない、1888年5月7日、86歳のとき、「学位令」（勅令13号）により日本初の理学博士（博士としても1号）を取得したことである⁽¹⁾。

この二つの「日本初」のうち、前者の『泰西本草名疏』の出版は自発的な行動の結果であったわけだが、後者の理学博士取得は自身の思惟とは無関係である。すなわち、圭介が取得した博士号は、論文提出を経た審査ではなく、「学位令」第三条により、文部大臣森有礼が自身の権限で有資格者として5分野25名を挙げ、その可否を帝国大学評議会の議に委ねた結果であった⁽²⁾。圭介はこの25名に名を連ねたわけであるが、1888年（明治21）3月19日の評議会では、圭介をはじめとする11名への学位授与は否決されている。しかし、この判定結果を帝国大学総長渡辺洪基より復申された森は、不服とともに再議の意を伝え、3月26日の評議会には自らも出席し、その結果、圭介への学位授与が決定したのである。

いわば森の主導により、圭介は学位を取得することができたわけである。3月26日の評議会議事録を見る限り、森は「古風ノ学者」と「正則学者」の区別を排して、誰とは明言していないが、「多年一身ヲ学問ニ寄セタル」功績を評価しようとしており、あるいは圭介への学位授与を企図したものであったかもしれない⁽³⁾。その推測が妥当であるとしても、この場合の森の圭介評価は、国内的に見れば圭介が多年自身の専門とする植物学に邁進したということに過ぎず、これに対し帝国大学評議会は当初、近代科学からかけはなれた手法をとる圭介への博士授与を否決していたのである。いわば時代遅れともいえる老研究者の圭介に、明治政府は学位を授与しようとしたわけである。

しかし、管見の限りでは、明治政府、とりわけ森が、伊藤圭介への学位授与を強く推した理由を示す史料は確認されていない。また参考史料として、圭介が何度か受けた叙勲の理由書は存在するものの⁽⁴⁾、その文面は非常に曖昧である。そのような現状ではあるが、以下、伊藤圭介が日本初の理学博士を取得するに至った背景について、明治政府への出仕前後における国内外での同人の評価を総括して位置付けを図りたい。

1. 維新前の伊藤圭介の活動に対する評価

尾張の町医時代、圭介がシーボルトに師事した成果として『泰西本草名疏』（1829年）を出版したことは、国内外の自然物を国際的に通用する表現方法を紹介したという意味から、学位取得への大きな学術的根拠となり得たものと思われる。またシーボルトは、日本の植物を自著で紹介する際、圭介の教示を受けたことを記して、圭介



学位取得直後の伊藤圭介
1888年（明治21）5月16日撮影
（名古屋市東山植物園所蔵）

の名を国際社会に知らしめたが、このことは海外からの評価として重要な意味をもったであろう。さらに、1861年（文久元）からは幕府蕃書調所において、西欧の学術および情報を研究する洋学者として活動したことも見逃せない⁽⁵⁾。

このほか、尾張藩内では、洋方医として種痘もしくはコレラに対処するための活動とともに⁽⁶⁾、幕末の日本に接近する西欧列国に対応するため、对外情報の入手さらには藩の創設した「洋学所」で総裁という名で洋学者の養成に携わったことを挙げることができよう。しかしながらこれらの活動は、理学博士取得の付加的要素とはなっただであろうが、自身の専門とする植物学からはほど遠く、ましてや藩内レベルに止まっており、国内でも高い評価を得たとは言い難い。

これに対し、1861年から63年までという短期間ではあったが、尾張藩籍のまま幕府蕃書調所の通称「物産方」に勤務し、国内外の自然物を、中国伝来の本草学体系から国際的に通用するリンネの分類に置きかえる作業とともに、物産の培養・調査そして博覧会の開催等を念頭におく、新学問として「物産学」の定義づけを行なったことは重要である。この「物産学」という学問名は、明治政府下で「博物学」などと改称されたものの、その研究規範は圭介の門人田中芳男らによって継承されており、近代的な学問を提示した圭介の業績が評価されたことは疑いない⁽⁷⁾。

2. 明治政府下での圭介の活動と学位取得に至る評価

以上、維新前の圭介の活動から学位取得の学術的根拠を探ったが、政権の異なる時代のことであり、これらの全てを明治政府が評価材料と考えたかは疑問が残る。その意味でも、やはり明治政府下での活動を最大要因として考えねばなるまい。以下、同人の明治政府下での活動を簡略に見ておきたい（後掲「年表」参照）⁽⁸⁾。

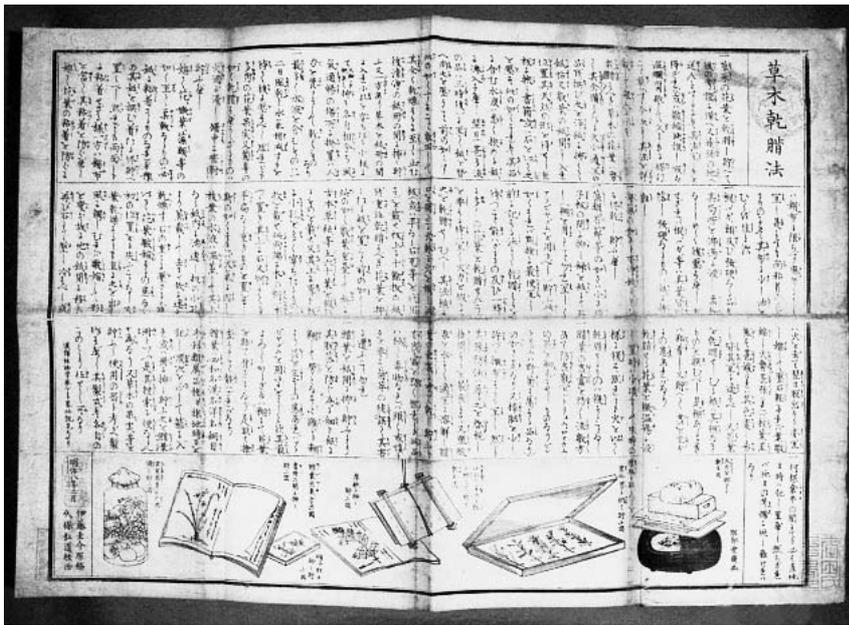
(1) 本務の内容

尾張藩医であった圭介は、政府の招聘を受け1870年に奉職するが、立場は不安定で、74年から75年にかけて失職した時期もある。その意味で、同人の明治政府下での本格的な活動は、1875年（明治8）6月、小石川植物園での業務開始以降と考えられる。とすれば、学位取得の根拠は、それ以後の、彼が東京大学教授を非職となる1886年までか、あるいは博士の選考会議がもたれた1888年3月までに存在するとしてよからう。そこで、この間の圭介の本務を見てみると、地位の向上はあったにせよ、一貫して小石川植物園で植物の調査を行っていた。前述したように、自身が日本で初めて紹介した方法にのっとり植物の分類を行うという作業で、蕃書調所物産方での勤務内容とさほど変化はなかったであろう。海外に存在もしくは日本にもたらされる植物を、古今東西の書物で調べ、知識を集積するとともに、国内の植物については、海外で紹介されているか否かを見極め、新種については海外で発表しようと試みていたものと思われる。

しかしながら後者については、圭介の責務というより、東大理学部教授の矢田部良吉らとその任にあったわけで、圭介の業務は発表のための下準備として認識されていたようである⁽⁹⁾。もっとも矢田部ら日本の植物学者として、日本近郊を調査する外国人研究者に命名の機会の多くを奪われており、自身たちができるだけ多くの業績を発表するには、植物について膨大な知識を集積し、既存か未知かといったことを判断できる圭介の鑑定眼を頼りともしていた。そして実は、これこそ圭介が学位を取得した最大の理由の一つと考えられる。この能力は、明治という活字文化の拡大にともない、圭介がその博識ぶりを発揮する多くの機会を得たため、高く評価されることになったのである。

(2) 公私にわたる著述活動と自然物の鑑定を通してみた圭介の評価

すなわち、官版としては日本で初めて押葉の作り方を記した『草木乾腊法』（1875年）、政府奉職直後さらには小石川植物園勤務後も継続した『日本産物誌』（1873年/76年/77年）のほか、日本に存在する植物の一斑を紹介した『小石川植物園草木目録』（1880年、翌年改版）またその図譜としての『小石川植物園草木図説』（賀来飛霞と共編、1881年）の出版がある。また私的には『日本植物図説 草部イ初編』（1874年）の出版のほか、「洋々社談」（1877年～1883年）、「東京学士会院雑誌」への「花史雑記」（1882年～1897年）⁽¹⁰⁾、「官報」への「救荒植物集説」（1884年）や「有毒植物集説」（1885年）といった論文の寄稿は、圭介の長年蓄積した自然物への知識の発露として、国内の学者陣の心を大きく捉えたものと思われる。その結果でもあろう、圭介は所属している学会で



『草木乾腊法』(1875年、筆者蔵)



第二回内国勸業博覧会審査表
(名古屋大学附属図書館蔵)

次々と名誉会員となっており、これらのことも学位授与への原動力になったことは想像に難くない。

また、植物園勤務以外に圭介が行なった政府業務についても、博士の選考会議で当然取上げられたであろう。すなわち第一回、第二回内国勸業博覧会の審査官(1877年、81年)、教育博物館(1877年~)、そして文部省編輯局への兼勤(1884年~)を挙げることができる。これらの勤務は、本務同様に圭介のもつ自然物の鑑定眼もしくはその自然物に関する書誌学上の知識を期待したものと見える。博覧会の審査官業務とは、全国からもたらされた産物の品質を見極め等級をつけることであったし、教育博物館でも、扱う対象は異なれども、植物園業務と同じく自然物の整理にあたったことが「日記」に見えている。また編輯局業務とは、『古事類苑』編纂に関わるもので、同じく「日記」によれば、植物に関する故事来歴の記述にあたり、執筆原稿の校閲・加筆もしくは新規執筆を依頼されており、こちらも圭介のもつ博識さをかわれた結果であった。

(3) 外国人との植物を介した交流による圭介の評価

圭介の学位取得につながる可能性のある活動を列記してきたが、加えて重視すべきは、圭介の外国人との交流である。前述したように、圭介は、シーボルトの著書によってヨーロッパでは知られた存在であり、日本を訪れる自然誌研究者らは、いまなお健在であるその「圭介」本人との学際的交流を期待し、接近を図ったのであった。たしかに国内評価も重要ではあるが、海外からの評価、これこそが圭介の学位取得に至る最大の要因ではなかったか。圭介のもとには、同人のもつ自然物の鑑定能力を期待して、サヴァチェ、ノルデンショルト、マッカーティ、張斯桂、ヘールツ、アーネスト・サトウら、国際的にも重要な位置づけをされた人々が接近しており(本書 参照) 明治政府としてもこれらを無視することはできなかったであろう。

おわりに

以上、伊藤圭介が日本初の理学博士を取得するに至る背景を概括したが、以下簡潔に結論づけておきたい。

すなわち、圭介の学位取得の背景として、第一に、幕政期に『泰西本草名疏』の出版で近代植物分類学を日本に初めて紹介し、引き続いて幕府蕃書調所「物産方」で自身が紹介した分類法に従って国内外の自然物を分類し直し、物産の培養・調査そして博覧会の開催といった、自然物研究についての規範を提示したことが挙げられる。

また、明治政府下での活動に目を向ければ、東京大学教授を非職となるまで小石川植物園を足場に多くの出版物を手がけたが、その成果は、圭介のもつ古今東西新旧の書物に裏付けられた知識、さらには実地で自然物を同定する追隨を許さない並外れた鑑定眼に由来するものであり、これを第二の要因と考える。

そして第三に、自然物に関する学識を頼りに、多数の外国人研究者が圭介に接近するという、「国際評価」の存在である。いわば、海外からの評価をうける形で、明治政府は圭介に学位を授与するとともに、それを通じて、日本を近代国家として対外的に認識させる意図を有していたとも考えられるのである。

注

- (1) 「日本大家論集」第二十編（1989年）には、圭介の肖像画、履歴書、学位記の写しが掲載されている。
- (2) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史一』1984年、964～971頁。
- (3) 森有礼が第一回の学位授与に際して著した演説（大久保利謙編『森有礼全集』第一巻、宣文堂書店、1972年、618～619頁）にある次の文章に端的に表れている。

但學術上功勞アルモノハ少ナカラス、例ヘ八王政維新前攘夷ノ気焰猛烈ノ時勢二拘ハラス、洋学ヲ研究シ世路ノ艱難ヲ凌キ、屈セス撓マス以テ欧米ノ新學術ヲ誘引シ以テ世運ヲ進歩シタルモノアリ

- (4) 国立公文書館蔵。
- (5) 土井康弘「幕末尾張藩洋学者 伊藤圭介の研究」(博士学位論文)2002年、昭和女子大学、全264頁。
- (6) 幕末に出版した『暴瀉病手当素人心得書』（1863年[文久3]刊）などにより、医療活動も評価されていたのか、「日記」1877年10月29日条には、相良知安らから同日のコレラ予防に関する会議に出席するよう要請されたことが確認できる。なお使用した圭介「日記」は、すべて名古屋市東山植物園に蔵せられている。
- (7) 当初第一回の学位授与に関して森有礼は、圭介に加え田中芳男も候補に揚げたが、二度にわたる評議会でも結局否決されている。これには森も評議会で同意しており、同じ専門分野で子弟の関係にある伊藤、田中両氏に学位を授与することが不可能であると考え、先駆者の圭介のみに授与しようとしたと推断される。
- (8) 杉本勲『伊藤圭介』（1960年初版、吉川弘文館）のほか、「任免裁可書 明治三十四年任免巻一」（国立公文書館蔵、2A-18-任B255）、「叙勲裁可書 明治三十四年 叙勲巻一内国人」（同、2A-18-B255）、「伊藤圭介翁履歴」（東京大学 教養学部図書館、旧資源科学研究所本、B3-809）などを参考にして作成した。
- (9) 圭介は門人に対しては次のように述べていることから（篠遠喜人・向坂道治『大生物学者と生物学』興学会出版部、1930年、388～389頁）発表のプライオリティーについては相当な気概を有していたことがわかる。

すべて何物にても発見したり、考へついたりしたことは、いかなる方法を以ても世に発表せよ。たとえその説の誤れることが後に明白になつても、論敵が互に学問的論争を戦はさんには、その結果学問の進歩を大いに進めることなる。一時は国辱的論文なりと罵られてもよし唯胸に秘めておくのみにては老いて必ず後悔すべし。一旦確信した上は自己の恥辱などを考へずに世界人類のために信念を発表することは大丈夫のなすことなり。

むろんこの学問への姿勢は孫篤太郎に引き継がれたのであろう、叔父謙の発表した新種をいち早く発見し断固として伊藤家のプライオリティーを守ろうとした篤太郎の行動が誤解を生み、「破門草事件」などといった事件を引き起こしたことは残念の極みである。なお篤太郎の伝記については、土井康弘「植物学者伊藤篤太郎の生涯 - 北海道大学北方資料室蔵、伊藤篤太郎の宮部金吾宛て書簡の紹介をかねて -」（『科学医学資料研究』第31巻第2号（通巻342号）、2003年）を参照のこと。

- (10) 佐藤達策「文部省出仕以降の伊藤圭介の書籍編纂と出版」（圭介文書研究会編『伊藤圭介日記第五集』、名古屋市東山植物園、2000年、143～153頁）、「明治初期伊藤圭介の啓蒙的著作活動」（同編『伊藤圭介日記第七集』、2001年、193～201頁）、「伊藤圭介の晩年の著作「花史雑記」について」（同編『伊藤圭介日記第九集』、2002年、218～225頁）。

〔付記〕本稿は、第二回野間科学史医学史研究助成による研究成果の一部である。

1. 家学としての医学と浅井家

伊藤圭介は自らの医学との関わりの端緒を次のように述べている。「文化六年(齡七年)箕裘ノ業医学ヲ父西山玄道、兄大河内存真ニ從テ修行シ・・・」(「東京学士会院会員理学博士伊藤圭介ノ伝」1890年[明治23])。ここで「箕裘ノ業」(父祖伝来の業) と言うように、圭介にとって医学はまず家学としてあったのである。1820年(文政3)には、すでに18歳で藩からの許可をえて、一人立二段席に列し町医の資格をえている。

父西山玄道はその医学を儒医石川香山に学んだ。7歳年長の兄大河内存真は尾張藩医浅井貞庵に医学を学び、のち尾張医学館の都講(塾頭) となった。父の師石川香山は尾張藩医浅井図南(浅井貞庵は図南の孫にあたる) に学んだのであって、圭介が医学を学ぶ環境は、尾張藩医浅井家と深い関係があった。

浅井家は図南の父浅井東軒以後歴代尾張藩医を襲い、明治にまで至っている。浅井貞庵は『古今方彙』の解説書『方彙口訣』を著して、『傷寒』『金匱』に限ることなく隋唐から明清に至る方書からの処方について記述したことからもわかるように、張仲景の処方以外には取るべき処方はないとする吉益東洞流の古方派(古方医) とは一線を画している。またその残された講義集『傷寒論講義』『堯甫先生傷寒論口義』にも、初学の者が『傷寒論』の全体的な構成に注意をはらって読む必要性を説くなど、『傷寒論』を思うがままに改竄する古方派の危険性を感じていたようである。しかし一方で成無己以来の中国の注釈家を論評しながら、治療の書として『活人書』(宋・朱肱) が最もよく、次に『傷寒六書』(明・陶華) 次に『医聖元戎』(元・王好古) さらに『症治準繩』(明・王肯堂 「症」は「証」が正しい) と挙げて、いずれも実際に「腕試ヲシテ認夕書」であるから有益である、とするなど(『堯甫先生傷寒論口義』) 必ずしも後世派(後世医) として自らを狭く限るのではなく、むしろ寛容な是々非々の態度であったようである。

2. 和蘭医、そして古方医、後世医

圭介が蘭学を学んだのは、1821年(文政4) 京都に遊学し、藤林泰助(普山) に師事したときである。京都には2年滞在するが、帰国後はさらに吉雄俊蔵(常三) について蘭学の研修をかさねている。この間のものとして解剖書など蘭書の医学書の翻訳があり、京都では藤林泰助主唱でなされた刑屍の解剖に立ち会ったりしている。

漢学から蘭学へとすすんでいったこの当時の圭介は、自分を取り巻くさまざまな医学流派にどのような感慨をいただいていたであろうか。この問題については遠藤正治氏が紹介された「与浅井德音書」が興味深い。(「伊藤圭介の医学思想について」『伊藤圭介日記第六集 錦窠翁日記(明治六年七月~十二月)』所収)

この書簡は、1824年(文政7) 兄大河内存真の家塾に学んでいた東濃の浅井德音が学業を終えて帰郷する送別の辞として書かれている。浅井德音がいかなる人物であるかは不詳である。しかし親しい関係であったとみえ、彼らを取り巻く古方医、後世医、和蘭医について彼と議論したことがあるとして、その内容を記す。

そこではまず、古方医は素問や靈樞といった聖經を蔑棄し、唐宋名家の処方を排斥して、傷寒論だけを主張しているが、実際は張仲景に徴したのではなく、自分勝手に作り上げたものにすぎない。聖經は依拠すべきものであり、唐宋以来の処方も取捨して採用すべきものである、とする。一方後世医には、素問、靈樞、難經、傷寒論、金匱の経方を根底として、金元の医論を連ねあわず、という原則には賛成しながら、その実状は古典の理論的究明は不徹底であり、その処方も明清の数家の余唾を株守するにすぎない、と手厳しい批判をあげている。

和蘭医に対しては、その学問は正確で「究義観物」(義を究め物を観る) こと「極めて条理有り」、「能学にして無謬」と肯定的にとらえている。ただ付和雷同する軽薄な徒輩が、「万古不刊の聖典」を廃棄しようとする事、蘭薬を強引に日本に用いようとしたり、十分な検討もなく代用薬が用いられる、という現況を憂えている。

ここで結論として述べられているのは、理論書としての素問、靈樞、方論としての傷寒論といった古典を枢軸

として、唐代の『千金方』『外台秘要』や宋代の方書、さらには明清の諸家の書を渉獵し、日本及び和蘭の経験を補助とすべきである、といったきわめて折衷的なものである。しかも蘭学を学んだといっても伝統医学がすてられることはなかったのであり、依然としてその中心を占めているのである。

圭介も学んだ蘭学者吉雄常三は浅井貞庵の斡旋をえて尾張で活動することになるのであり、浅井貞庵は蘭学を敵視していた訳ではない。とすればここで圭介が述べたことは、浅井貞庵の考えと大きく懸離れたものではなかったであろう。

3. その後

その後、1826年（文政9）のシーボルトとの出会いをきっかけに、圭介は翌年長崎で半年にわたってシーボルトについて学ぶことになる。長崎では吉雄権之助の家に止宿した。

圭介は1870年（明治3）東京に出て大学に出仕したのをきっかけに、医業を廃した、とされている。その間の医学関連の業績としては、天保の大飢饉には「救荒植物便覧」を刊行して飢饉に対処しようとしたこと、1863年（文久3）には「暴瀉病（ころり）手当素人心得書」を作り広く頒布したことなど、がよく知られている。

また1841年（天保12）には「嘆喟喇国種痘奇書」を刊行している。尾張地域では始めて紹介された牛種痘法であった。種痘についてはその後も尽力を惜しまず、尾張藩の種痘所設立に結びついていくことになる。

1854年（安政元）には圭介鑿試、石黒通玄執刀のもとに、刑屍の解剖がおこなわれている（蓬左文庫蔵「解剖諸事留」）。尾張藩としては二度目の腑分けであり、圭介にとっては京都での経験に次いで二度目となる。

こうした業績やわずかではあるが残された治療記録はあるものの、医学理論に対する業績や医学思想が端的に窺えるような資料となると今日残されているものがない。恐らく圭介にとって医学は実際の治療と啓蒙活動とが中心をしめ、関心の中心は「植物学」へと集中していったのであろう。その際圭介のなかで医学がどのように関わっていったのかは興味ある問題ではあるが、今後の課題としたい。

しかしこうした啓蒙活動の一つとして、1870年（明治3）圭介は石井隆庵、中島三伯と連署して名古屋藩知事に西洋医学講習所の開設を請願している。西洋医学の進歩をめざすものであったが、仮病院の開設などを通じて、名古屋大学医学部へと今日にまでつながっていることは特筆しておくべきことであろう。

伊藤圭介関係年表

西暦	和暦	年齢	月 日	事 項
1803	享和 3	1	1月27日	名古屋呉服町で生まれる。
1805	文化 2	3		水谷豊文、御薬園御用懸に任ぜられる。
1810	文化 7	8		父西山玄道から医学を学ぶ。
1816	文化13	14		吉雄常三、名古屋の地に留まる。
1818	文政 1	16		水谷豊文らに従い各地で採草する。
1820	文政 3	18	5月	医業を開き一人立二段席に列する。
1821	文政 4	19		京都に赴き、藤林泰助から洋学を学ぶ。
1822	文政 5	20		京都を去り、各地で採草して帰郷。水谷豊文に従い、知多・猿投山で採草する。
1823	文政 6	21		吉雄常三から洋学を学ぶ。
1826	文政 9	24	2月21日	宮宿でシーボルトに会う。
1827	文政10	25	3月15日	自宅修養堂で第1回薬品会を開く。
			5月	江戸に出て、宇田川榕菴の家に寄家する。
			5月	処女作『人參説』を著すと伝える（『人參培養説』 特論1参照）。
			7月	江戸を発し、一旦郷里に帰る。
			8月12日	名古屋を出立、9月4日、長崎に到着。シーボルトに師事し、博物学等を学ぶ。
1828	文政11	26	3月	長崎を去り帰郷、蘭方医を開業する。
1829	文政12	27	10月	『泰西本草名疏』を出版する。
1830	天保元	28	10月	高野長英来訪する。
1831	天保 2	29		浅井紫山の私塾静観堂、尾張医学館となる。
1832	天保 3	30	4月	母たきに従い善光寺開帳に参詣、戸隠山で採草する。
			9月1日	自宅修養堂で第2回薬品会を開く。
1833	天保 4	31	7月	熱田沖で捕獲された海獣をボカ・レオニナと考定する。
			8月	『救荒本草私考』を脱稿する。
1835	天保 6	33	3月15日	名古屋一行院で水谷豊文三回忌本草会を開く。
1836	天保 7	34		大窪昌章、薬草調査のため木曾に出張する。
1837	天保 8	35	4月	『救荒食物便覧』を出版。藩主、その板木を借上げ、頒布する。
1838	天保 9	36	5月	幕府役人ら、檜伐採のため木曾に赴く。圭介ら医師として木曾に出張。
1840	天保11	38		吉田高憲、薬草調査のため木曾に出張する。
1841	天保12	39	12月	『嘆喁喇国種痘奇書』を校刻する。
				上田仲敏と協力、上田邸内に洋学館を開設する。
1843	天保14	41	4月26日	父西山玄道没。
1847	弘化 4	45	11月	御用人支配医師に列せられる。
				『産物見聞誌』を脱稿する。
1848	嘉永元	46	2月	洋書のうち、役に立つ物を翻訳して献上するよう藩命を受ける。
			3月	修養堂に薬品会を開く。
			3月14日	前年度上田仲敏とともに蘭学訳書の研究を藩主へ建議し、この日許可を得る。
			4月	『乍川紀事詩』を出版する。
1849	嘉永 2	47	11月23日	柴田方庵、牛痘を圭介の娘らに施す。
1850	嘉永 3	48		自宅に種痘所を設ける。『表忠詩鈔』を出版する。
1851	嘉永 4	49	6月	『現代史』蘭訳から『日本篇』を翻訳する。

			10月	『遠西硝石考』を訳述する。
1852	嘉永 5	50	5月	種痘法創業により、藩主より取調の内命を受ける。
			8月	種痘所が名古屋山田町におかれ、兄大河内存真らとともに取締りを命じられる。
1854	安政元	52	2月21日	新屋敷御様場で人体解剖の鑑試をつとめる。
			3月	異国船渡来の際の筆談役を任じられる。
			4月	三百目加農砲を鑄造し、藩主に献じる。
			8月	西洋天文学・地学の研究を心得るよう申達を受ける。
			10月	『遠西硝石考』を改訂し、『万宝叢書 硝石篇』として出版する。
1855	安政 2	53		近江伊吹山・山城各地・摂津有馬・伊勢朝熊山・志摩青峯等で採草する。
1858	安政 5	56	2月	名古屋朝日町で旭園を開設する。
			4月	旭園で嘗百社博物会を開く。
			5月	嘗百社社員らと伊勢菰野山で採草する。
				この年、『輿地紀略』を覆刻する。
1859	安政 6	57	6月	藩から寄合医師に命じられる。
			年末	洋学所総裁心得を申渡される。
1861	文久元	59	3月25日	旭園で博物会開く。
			9月	幕府から蕃書調所物産方へ出役を命じられ、10月17日江戸に出発する。
			11月10日	シーボルトと横浜で再会する。
1862	文久 2	60	3月25日	旭園で博物会開かれる。
1863	文久 3	61	3月晦日	江戸出立（4月11日名古屋着）
			12月	開成所（旧藩書調所）を辞任する。
				この年、洋学館を自宅に移す。『暴瀉病手当素人心得書』を出版、頒布する。
1864	元治元	62	8月	前藩主慶勝、征長総督として西行するのに従う。
1865	慶応元	63		奥医師見習いに任じられる。
1867	慶応 3	65	2月 9日	御目付を命じられる。
1868	慶応 4	66		前年から前藩主慶勝・藩主義宜に従い、京都・大阪に滞在（8月6日帰郷）
	明治 初 年頃			圭介を中心とする種痘医グループが、種痘所の改革を協議する（西洋医学校構想が、尾張ではじめて示される）
1869	明治 2	67	7月	自宅政事堂で洋学を講じる。
				この年、一等医に列する。
1870	明治 3	68	8月	圭介ら3名、医学所設置の建議書を名古屋藩庁に提出する。
			10月	明治政府より大学への出仕を命じられる。
			閏10月	名古屋藩より種痘所頭取・病院開業係に任命される。
			11月28日	名古屋出立、12月8日市谷尾張藩邸に仮住。
			12月13日	大学出仕を仰せ付けられ、文部少博士準席となる。
1871	明治 4	69	7月27日	文部省出仕を仰せ付けられる。
			8月22日	文部少教授に任ぜられる。
			8月	仮病院・仮医学校（名古屋大学医学部の前身）が設置される。
			9月23日	本官を免ぜられる。
			9月24日	編輯権助に任じられる。
				この年、本郷真砂町に居を構える。
1872	明治 5	70	4月20日	本官を免ぜられ、文部省七等出仕を仰せ付けられる。
			4月22日	博物専務を仰せ付けられる。
			9月14日	出仕を免ぜられ、御用滞在を仰せ付けられる。

1873	明治6	71	4月13日	文部省編書課出仕を仰せ付けられ、『日本産物志』の編纂に従事する。
				この年、『日本産物志』山城部2冊、武蔵部2冊、近江部2冊完成、文部省より刊行する。
				この年、洋々社を創立、『洋々社談』を出版する。
1874	明治7	72	2月	『日本植物図説』草部イ初篇を三男謙の編次で出版する。
			9月15日	出仕を免ぜられる。
			9月20日	位記を返上する。奉職満1年以上につき其賞として目録の通り下される。
1875	明治8	73	2月	一枚刷『草木乾腊法』を刊行
			6月1日	文部省より、小石川植物園へ時々出仕すべき命あり。
1876	明治9	74	10月8日	田中芳男の誘いにより玉川に遊ぶ。
1877	明治10	75	1月16日	東京博物館1か月金40円渡される旨命じられる。
			5月9日	植物園で植物取調を囑託され、毎月金40円を贈られる旨を命じられる。
			9月8日	東京大学理学部員外教授を命じられる。同10日、従前の通り植物園に出勤し植物取調べを担当。
			9月18日	第1回内国勲業博覧会の審査官を命じられる。
			9月20日	本務の余暇月3回、教育博物館に出勤を命じられる。
			10月	東京大学理学部より『小石川植物園草木目録』前篇印行。
1878	明治11	76	2月5日	第1回内国勲業博覧会の審査官務勲励につき賞品を下賜。
			6月16日	大槻盤溪の葬式に出席。
			8月15日	父母の祭事(8月26日)のため帰省(9月15日東京に戻る)。
				この年、文部省より『日本産物誌』美濃部を刊行。
1879	明治12	77	2月	『菩多尼詞経』(宇田川榕菴著)、『西説觀象経』(吉雄常三著)を孫篤太郎の名で翻刻刊行する。
			3月28日	東京学士会院会員に選ばれる。
			8月26日	三男謙没(「郵便報知新聞」明治13年2月9日)。
			10月10日	ノルデンショルトと会う。
			12月25日	月給1か月70円交付となる。
				この年、文部省より『日本産物誌』信濃部を刊行。
1880	明治13	78	7月24日	後妻貞没。
			9月3日	犬飼瑞枝(楳の子)誕生。
			11月	スウェーデン国王立学士院より銀牌、銅牌を贈られる。
			11月24日	小石川植物園担任を命じられる。
				この年、東京大学理学部より『小石川植物園草木目録』後篇刊行。
1881	明治14	79	3月	第2回内国勲業博覧会の審査官を命じられる。
			6月	東京大学理学部より『小石川植物園草木目録』後篇改版刊行。
			7月14日	東京大学教授に任じられる(年俸金840円)。
			7月16日	東京大理学部勤務を仰せ付けられる。
			8月	第2回内国勲業博覧会の審査事務江勲励の賞付と慰勞金を受ける。
			9月24日	正六位に叙せられる。
			10月	奈良坂源一郎、愛知医学校に一等教諭として赴任する。
			12月	『小石川植物園草木図説』第1巻を賀来飛霞とともに刊行。
			12月3日	榊原芳野没。
1882	明治15	80	2月5日	東京植物学会創立の会合に出席(於小石川植物園)。
			3月31日付	第2回地理万国公会より賞牌を贈られる。
			4月16日	上野不忍生池院で八十賀寿晝筵会を開催(『錦窠翁晝筵誌』巻1を出版、頒布)。

			6月17日	勲五等双光旭日章に叙せられる
			9月6日	第3回地理万国公会より賞牌を贈られる
				この年、「花史雑記」掲載開始（～1897年〔明治30〕）
1883	明治16	81	5月23日	兄大河内存真没。
			12月5日	従五位に叙せられる。
1884	明治17	82	2月	『小石川植物園草木図説』第2巻刊行。
			3月6日	水谷助六来訪（以後、1888年〔明治21〕まで東京生活）。
			3月12日	孫篤太郎、横浜より出港（英国ケンブリッジ大学に留学）。
			6月9日	編輯局兼勤を仰せ付けられる。
				この年、「官報」に「救荒植物集説」掲載。
1885	明治18	83	1月1日	家訓を作り、家族に与える。
			5月16日	木村静山没。
			6月6日	大日本農会名誉会員となる。
			6月12日	箕作阮甫二十三回忌に出席。
			7月27日	墓参のため名古屋に赴き、美濃養老滝に遊ぶ。
			10月21日	満70歳以上で学芸上特に功労ある会員として年150円を支給される（東京学士会院より）。
			10月28日	かなのくわい名誉会員となるべき書簡を受ける。
				この年、「官報」に「有毒植物集説」掲載開始（～1886年〔明治19〕）
1886	明治19	84	3月3日	東京大学を非職となる。
			3月29日	古事類苑打ち切りを知らされる。
			3月頃	奈良坂、同志と博物標品を持ち寄り陳列会をはじめ。
			4月7日	文部大臣森有礼より、年金300円を受ける旨の通知。
			7月21日？	仙台に行く（～8月25日？）
			10月20日	加藤竹斎没。
			11月3日	画工時田没。
			12月4日	箕作秋坪没。
1887	明治20	85	2月17日	神波全庵没。
			2月	第1回教育博覧会が開催される（名古屋）。
			7月22日？	穴戸昌とともに名古屋へ出発（久能山、富士山に寄り8月19日帰京）。
			10月24日	自宅の蔵盗難。
			11月6日	篤太郎英国より帰国（神戸）。11月8日日本郷真砂町圭介宅着。
			11月25日	勲四等双光旭日章に叙せられる。
			12月2日	篤太郎と熱海に出かける（12月10日帰宅）。
				この年、浪越（名古屋）博覧会が結成され、奈良坂が会長に就任する。
1888	明治21	86	4月9日	水谷助六、名古屋へ帰住。
			5月7日	我が国初の理学博士の学位を授与される。
1889	明治22	87	7月	墓参のため名古屋へ帰省。桑名での博物談話会に参加・講演。
1890	明治23	88	7月	名古屋へ帰省（8月2日帰京）。
			10月5日	東京上野において圭介の米寿賀会が開催される。
1891	明治24	89	4月8日	東京を発ち、名古屋・岡山・宮島・姫路・京都などに遊ぶ（5月10日帰京）。
			9月	『錦窠翁米賀会誌』を出版する。
				この年、大須七ツ寺の西に愛知教育博物館が建設される。
1892	明治25	90	6月1日	亡父五十年祭のため名古屋帰省。
			7月5日	愛知教育博物館において「理学博士伊藤圭介翁九十賀寿博覧会」が開催される（～6日）。

			12月18日	伊藤篤太郎編輯の『錦窠翁九十賀寿博物会誌』が出版される。
1898	明治31	96	6月26日	伊藤篤太郎『理学博士伊藤圭介翁小伝』が出版される。
			10月25日	墓参のため帰省。名古屋で九老尚歯会が行われる。
1901	明治34	99	1月20日	圭介没（享年99歳）。
			1月26日	谷中において葬儀が行われ、谷中天王寺に埋葬される。
			9月	光勝院に「伊藤圭介先生之碑」が建てられる。
1915	大正4		5月	圭介の大礼贈位が検討される。
1919	大正8		11月10日	勝沼精蔵、愛知県立医学専門学校に赴任する。
1937	昭和12		2月	勝沼、名古屋市公会堂に名古屋市・愛知県・商工会議所などの地元関係者を集め、圭介の銅像建設を提唱する。
			3月20日	市立名古屋図書館において「伊藤圭介遺墨遺品展覧会」が開催される（～25日）。
1938	昭和13		8月	「伊藤圭介先生遺跡顕彰会」が設立され、勝沼が会長に就任する。
1939	昭和14		1月22日	光勝院において圭介の追善法要が執り行われる。
			1月27日	「伊藤圭介誕生之处」碑の除幕式が行われる。大成尋常高等小学校において記念講演会と展覧会が開催される。
1941	昭和16		9月	「愛知県科学技術振興会」が発足、初代名古屋大学総長澁澤元治が学術委員長に就任する。
1949	昭和24		7月11日	勝沼、第3代名古屋大学総長に就任する。
1955	昭和30		12月	圭介のご遺族伊藤一郎氏より名古屋大学附属図書館へ、圭介に関係した資料が譲渡される（伊藤圭介文庫）。
1956	昭和31		3月20日	名古屋大学附属図書館から『伊藤文庫図書目録』が刊行される。
			6月	伊藤圭介顕彰会が設立され、勝沼が会長に就任する。
1957	昭和32		春	東山植物園に圭介胸像が建てられる。
			5月5日	鶴舞図書館前に圭介座像が建てられる。
1958	昭和33		1月17日	「伊藤圭介先生誕生之地」碑が再建される。
1961	昭和36		3月15日	名城小学校と御園小学校に圭介胸像が建てられる。
1965	昭和40		3月17日	吹上小学校に圭介胸像が建てられる。

年表は、杉本勲『伊藤圭介』を参考に、事項選定及び成形を種田祐司、明治政府のもとの圭介の活動を土井康弘、顕彰活動及び名古屋大学関係については神谷智がそれぞれ担当して作成した。

参考文献

【論文】

- 小西正泰「殿様生物学の系譜 - 8 - 水谷豊文と伊藤圭介 - 尾張嘗百社をめぐる人々」(『科学朝日』49巻8号、朝日新聞社、1989年)
- 磯野直秀「江戸時代動物図譜における転写」(山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上、思文閣出版、1995年)
- 大森 実「伊藤圭介とオランダ人 A.J.C. ヘルツの交遊」(『日本歴史』573、1996年)
- 土井康弘「蕃書調所の物産研究と伊藤圭介との関係」(『法政大学大学院紀要』36、1996年)
- 竹中祐典「『日本植物図説』草部イ部初編の刊行年について - 伊藤圭介と P.A.L. サヴァチェの交流 - 」(『科学医学資料研究』270、1997年)
- 河村典久「丹羽修治と印葉図」(圭介文書研究会編『伊藤圭介日記第五集 錦窠翁日記』、1999年)
- 土井康弘「水野正信と松浦武四郎の交際と伊藤圭介」(同上)
- 土井康弘「蕃書調所出役時代の伊藤圭介」(圭介文書研究会編『伊藤圭介没後百年記念・伊藤圭介日記第八集 伊藤圭介日記』、2001年)
- 佐藤達策「伊藤圭介晩年の著作『花史雑記』について」(圭介文書研究会編『伊藤圭介日記第九集 錦窠翁日記』、2002年)
- 幸田正孝「尾張伊藤圭介著 男謙編次『日本植物図説』について」(同上)

【著書】

- Vegas färd kring Asien och Europa: jemte en historisk återblick på föregående resor längs gamla världens nordkust, af A.E. Nordenskiöld, 1880, Stockholm (A・E・ノルデンシエルド著、小川たかし訳『ヴェガ号航海誌』上・下、フジ出版、1988年)
- 実藤恵秀『明治日支文化交渉』、光風館、1943年
- 大隅米陽編『豊後国佐田郷土史』上巻、1952年(非売品)
- 勝沼精蔵『桂堂夜話』、黎明書房、1955年
- 杉本勲『伊藤圭介』、吉川弘文館、1960年(新装版1988年)
- 吉川秋芳『蘭医学郷土史雑考』、1967年(限定版)
- さねとうけいしゅう『近代日中交渉史話』、春秋社、1973年
- 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』、第一法規出版、1973年
- 国立衛生試験所『国立衛生試験所百年史』、1975年
- 渡辺正雄『お雇い米国人科学教師』、講談社、1976年(増訂1996年、北泉社)
- 矢部一郎『江戸の本草 薬物学と博物学』、サイエンス社、1984年
- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史一』、東京大学出版会、1984年
- 上野益三『忘れられた博物学』、八坂書房、1987年
- 阿部昭吾編『解剖学者奈良坂源一郎小伝』、宮城県矢本町、1994年
- 奈良坂源次郎『解剖学者奈良坂源一郎』、1995年
- 塚本学『江戸時代人と動物』、日本エディタースクール出版部、1995年
- 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』、汲古書院、1998年
- 横浜開港資料館編『図説アーネスト・サトウ』、有隣堂、2001年
- 神谷智『草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治』、名古屋大学大学史資料室、2003年
- 遠藤正治『本草学と洋学 - 小野蘭山学統の研究』、思文閣出版、2003年

【図録】

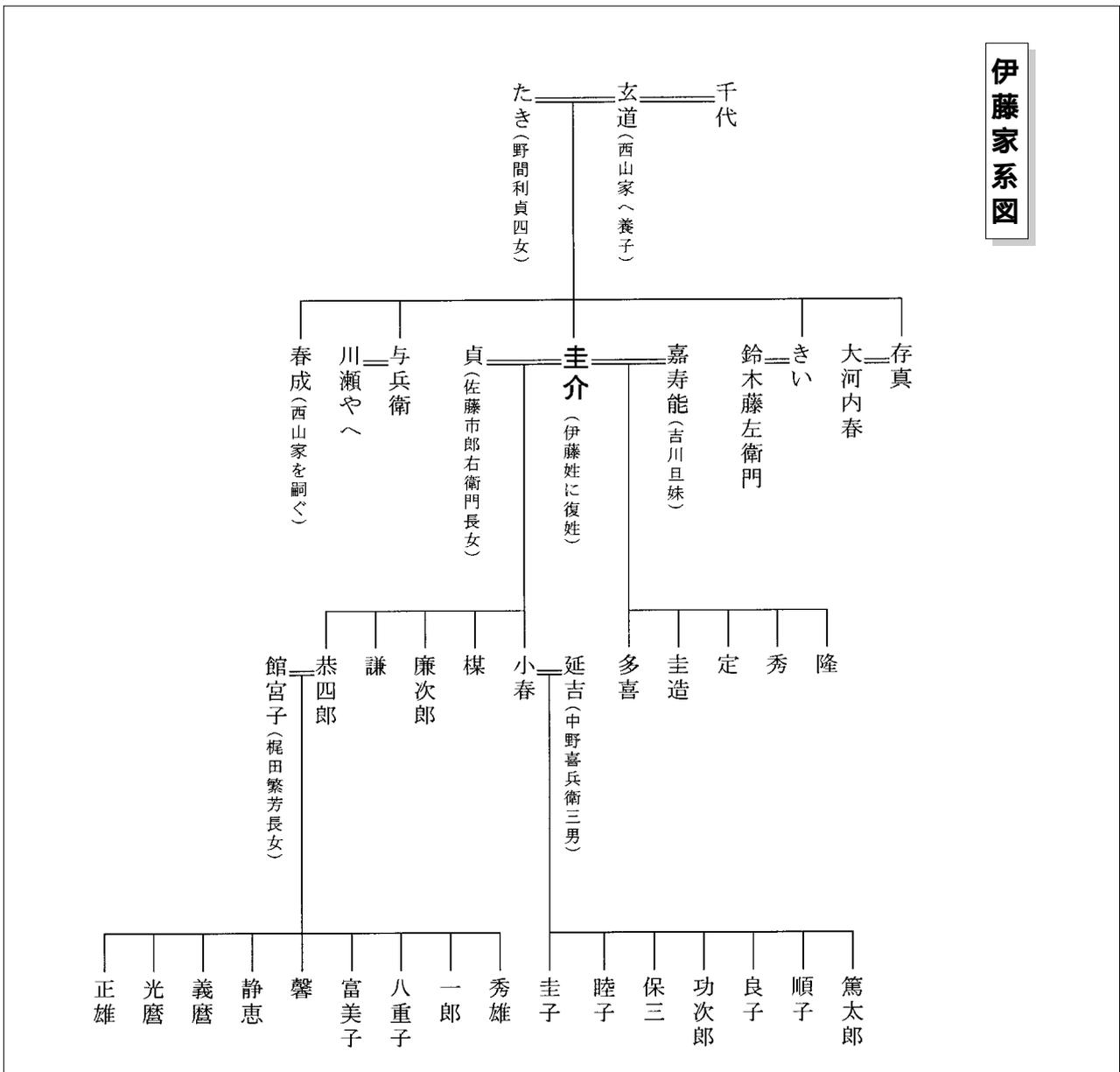
- 『尾張から見た日本と世界の医学史 - 第24回日本医学会総会「医学史展示」図録』(第24回日本医学会総会医学史展示小委員会、1998年)
- 『伊藤圭介と尾張本草学 - 名古屋で生まれた近代植物学の父』(名古屋市博物館、2001年)

【名古屋大学関係】

- 『伊藤文庫図書目録』(名古屋大学附属図書館、1956年)
- 『名古屋大学五十年史 通史一』(名古屋大学史編集委員会、1995年)
- 『江戸から明治の自然科学を拓いた人 - 伊藤圭介没後100年記念シンポジウム』(名古屋大学附属図書館、2001年)

【辞典・年表】

- 『日本外交史辞典』(外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編、1979年)
- 『世界有用植物事典』(堀田満ほか編集、平凡社、1989年)
- 『来日西洋人名事典(増補改訂普及版)』(武内博編著、日外アソシエーツ、1995年)
- 『日本博物誌年表』(磯野直秀著、平凡社、2002年)



実行委員（含 WG 委員）

伊藤義人（委員長） 内藤英雄
逸村 裕 北村明久
秋山晶則 臼井克巳
杉山寛行 郡司 久
塩村 耕 伊藤哲谷
山内一信 藪本大明
遠藤正治 蒲生英博
神谷 智 大澤 剛
種田祐司 岡本正貴
土井康弘
西田佐知子

調査協力

石川 寛 土田浩治
長屋隆幸 藤井伸二
船戸公子 山口隆男
横山 進 若松克尚
伊藤圭介先生顕彰会
大阪市立自然史博物館
岐阜県歴史資料館
東京国立博物館
名古屋市東山植物園
名古屋市立名城小学校
名古屋市鶴舞中央図書館
名古屋市博物館
名古屋大学大学史資料室
名古屋大学博物館
ライデン国立植物標本館（オランダ）

講演会 「博物誌の時代と伊藤圭介」

日時：2003年10月18日（土） 13：00～16：00

場所：名古屋大学中央図書館 5F 多目的室

講師：磯野直秀（慶應義塾大学名誉教授）「日本の博物誌と伊藤圭介」
土井康弘（国土館大学非常勤講師）「日本初の理学博士の誕生」
杉山寛行（名古屋大学大学院教授）「伊藤圭介と医学」

伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会

錦窠図譜の世界 - 幕末・明治の博物誌 -

会期 2003年10月17日(金)～30日(木)

会場 名古屋大学附属図書館 4F 展示室

主催 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

後援 愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会

伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会

錦窠図譜の世界

幕末・明治の博物誌

発行日 2003年10月15日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-3667 FAX 052-789-3693

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館

